

本能と本能が惹かれ合う

物語を始める前に、ちょっとした御話をしよっか。

この世界には人間としての階級がある。それは生まれた時から決まっていて、これからの自分自身の人生を大きく変えてしまう、とっても重要なものなんだ。

じゃあ、その階級ってナニ？ って話なんだけど……面倒臭いから手短かに済ませちゃうね～。え？ だって細々としていて志希ちゃん自身もよく分からないんだよねえ、興味ないし。にやはは♪

ああ、それでね、その階級っていうのは三つに分かれているんだ。上から【 α (アルファ)、 β (ベータ)、 Ω (オメガ)】という種類があって、男女共々どれかに当て嵌まる訳！

- ・男性の α 、女性の α
- ・男性の β 、女性の β
- ・男性の Ω 、女性の Ω

の計六種類に分かれる。

そして一番上の α から説明をしていくと、 α 性の人間は世界で少数しか居ないみたい。それもその筈！ α は生まれつきのエリート人間なんだよね～。社会的地位も高く、全てにおいて優遇をされる。よくいるでしょ？ あの歴史で有名な『余は生まれながらの将軍である！』とかって言ってたやつ。あれみたいなもんだよ、多分。うん、多分ね？

まあ、あとは身体的機能が特化しているみたい。男女共々【両性具有】とかね。……はふう。あー、説明するのが飽きてきたなあ。

んで、 β 性は这个世界でいう、ごくフツウの人間。人口比率も最も多い。まあフツーが一番だけだね、志希ちゃんには退屈しそうな階級かなあ。はい、次。

最後は Ω 性。この階級の人間は、 α 性と同じで圧倒的に少ないみたい。下手したら α よりも希少価値があるんじゃないかによ？ 一部の地域では手厚く保護されていたりもするし。

でも、大体の地域では社会的地位が一番ひくいんだよね。

この Ω 性の人間には特殊な体質があって、約三ヶ月に一度の【発情期】が存在するみたいなんだ。

しかも、その発情期が厄介で誰彼構わず誘惑しちゃうらしいよ。だいたーん♪

ま、その体質の所為で生活に支障を来したり、 α 性や β 性の人間を誘惑したくなくてもしちやったりして大変みたいだけだね。御愁傷サマって感じかな。

どうやらこの物語では、その発情期で発する美波ちゃん(この世界では同い年らしい)のフェロモンに志希ちゃんが瞬殺されちゃうらしいです！ 精神的に！ さっすが美波ちゃんってば、別世界のアイドル界ではお色気たんと……いや、ごめん、なんでもないよ。にやはは……。

他にも大事な【番(つがい)】とか色々あるんだけど、ちょっと志希ちゃんはお眠なのでそろそろ寝ます。物語を読みながら感覚で掴んでいった方が多分早いよ。知りたかったらネットかなに『オメガバース設定』で検索をすれば出てくるし、うんうん。

書き手によっては細かな部分は自由だから、もういいんじゃないかな？ 説明は、自分に興味がない話って、説明するのも聞くのも苦痛なんだよね。志希ちゃんの興味は三分しか持ちません。

え、志希ちゃんはどうやって？ α 性の人間だよー。

じゃあ、もうそろそろいいかによ？

……てな訳で、おやすみにやさーい！

\pm S M

ゆさゆさ、ゆさゆさ、体が揺れる。

ああもう、そんなに揺らしたら椅子から落ちるっつの。大体こんなことをするのは、絶対にあのお堅い生徒会長サマでしよ。ちよつとくらい失踪したって良いと思うけどなー、志希ちゃんは。

「……きちちゃん！ 志希ちゃん！ 起きて、もうっ！」

耳許で特徴のあるソプラノ声に呼ばれると、いよいよ煩くて志希はゆつくりと目を開けた。少しの怒気を含んだ表情で志希の肩を揺らしていたのは、やはり想像通りの人物である。

懲りないなあ、と呆れ気味に大きな欠伸を一つ。再び眠りに就くことを諦めてから、とても面倒臭そうに体を起こした。どうにもこの生徒会長サマとやらは、あたしが尽く失踪を繰り返しても、しつこく探し回って見つけてくる様子らしい。サボりはよくないよ？ と周りから見たら、不良極まりないあたしのことを真面目な生徒会長サマは放っておけないだろう。お節介にも程がある話だよ、ホント。

「……美波ちゃん、暇なの？」

「暇に見える？ 志希ちゃん」

「うん。とつても」

ぐっと体を伸ばし、机の上に置いていたスマートフォンを起動させると時刻はお昼の二時近く。そろそろ五限目が終わる頃だろう。眠っていたのは一時間くらいか。うーん……。今回は割と見つかるのが早い。

志希は苦笑いをし、のそのそとカーディガンを羽織った。

「志希ちゃん、もう少し真面目に授業へ出ようよ」

「……その台詞を学年トップのあたしに言う？」

「う……っ、」

「真面目に授業へ出て、教師からも受けがいい美波ちゃんが、真面目に授業も出ていないあたしに毎回トップを奪われているって……どんな気持ち？」

くくつと喉を鳴らして嗤うと、カチンと来たのだろう。顔を真っ赤にして拳をぎゅつと握り締めた美波の顔は、分かりやすい程に怒りを堪えている。それが志希にとっては面白く感じた。単純な人からかうと表情や態度がコロコロと変わり、見ていて飽きない。興味は湧かないけれど。

「じゅ……授業への出席率と成績の順位は、今は関係がないと思う」

「へえ、どうして？」

「モラルの問題よ。結果が良ければ何でもしていいっていう訳ではないもの」

「ふーん」

「ふーん、って……」

だってねえ、志希ちゃんは興味が無いんだよ。

どうしたって湧かないの。零に何を掛けても零でしょ？

結果は出しているし、そもそもあたしがぶつちぎりの成績でテストの点数を取ってしまっている所為で、周りの生徒と張り合いがない。おまけに、内容が外国で学んだ授業よりもレベルが低いときたら、ねえ。

(※言い忘れていたけど、あたしは飛び級でアメリカに留学をして帰国をした才女なんだ。あ、自分で言うなって？ にやはは、)

なのに、その学園に興味を湧かせと言われても、どうやって興味を持てばいいのか。是非とも教えてほしいくらいだ。志希はつまんなさそうに、ビーカーへ淹れた珈琲をずずつと啜った。ここで寝る前に淹れたものだからか、大分冷めてしまっている。

「……α性の人って、何でも捻くれているの」

ぼつりと美波が呟いた一言を志希は上手く聞き取れなかった。いや、聞きたくなかったのかもしれない。

でも、興味がなかったので言及はせずに無視をした。志希は昨夜、自身の趣味である実験に没頭してしまい寝不足なのだ。要はその寝不足と、眠いところを煩く起こされた所為で、現在もの凄く不機嫌だった。フツの人間に構う程の氣力を今は持ち合わせていない。

こくりと最後の一口を喉に流し込むと、美波は何やら思案していた。わあ……如何にもメンドーなコトを考えている顔だねえ、美波ちゃん。

「分かった。……次の期末試験で私が志希ちゃんに勝ったら、言うことを一つ聞いてもらうから！ そしたら、もうサボっちゃ駄目ですからね！」

……は？ 志希は思わず、空になったビーカーを落としそうになってしまった。突拍子もないことを言い出す美波に面を食らう。随分と、頭のいい彼女にしては浅はかな賭けに出たものだと思志希は嗤った。

——でも、

「面白そだねえ。いいよ？ じゃあ、あたしが勝ったら逆に美波ちゃんと言うことを聞いてくれるんだよね？」

少しだけ、興味が湧いた。

いい暇潰しが出来そうだと、べろりと舌舐めずりをする。

先に説明をしておくと、志希の知能指数は他の人よりも飛び抜けて高い。何故なら一ノ瀬志希は α 性の人間だからである。この世界で存在する三つの階級の内、一番上のエリートクラス『 α 』は、知能も身体的能力も抜群に高い。生まれ持った才能であると云うべきか、だからこそ志希は一度見聞きしたことを忘れはしない。授業も教科書に一通り目を通せば、それで事足りる。周りの人達が大変そうにしている事柄を α 性の人間は、一ノ瀬志希は、あっさりとなしてしまふのだ。

だからこそ、志希はこの日常が退屈でもあった。フツの人間が志希に刃向かったところで、結果は目に見えている。 α （天才）と β （フツ

）では、立っている土俵が違うのだ。そんな人間に喧嘩を売るなんて、みすみす自分から負け戦を行っているようなものだろう。

いくら彼女、新田美波が秀才で教師や生徒からの信頼も厚く、生徒会長という座に就き、全校生徒の模範として歩いていても、志希のような天才には敵う筈がない。多分それだけ、美波は志希に授業を受けてほしいのだろうけれど。

「う……、な、なんでも言うことを聞くからつ、志希ちゃんも逃げないでよね！」

ぐつと唇を噛み締めて覚悟を決めたらしい彼女は、ビシイと人差し指を志希に突きつけた。なんて愚かな。

でも、まあ面白そうなことが起きたものだ。自分に利益があるならば、断る理由も特にならない。志希は快く、美波の挑戦を受け入れた。

「はいはい。じゃあ、またね。美波ちゃん♪」

志希は適当に対応をしながら手をひらひらと振り、美波の頬にチュッの一つ口づけをした。……ん？

「つ……、！ 志希ちゃん！」

「え……？ ああ、ごめん。からかうつもりだっただけ、なんだけど」

彼女は顔を真っ赤にしながらか、慌てて教室へ去ってゆく。

相変わらず、からかい甲斐のある反応だ。——にしても、

「なんで、こうも近寄ってくるのかにやあ……？」

ぼりぼりと志希は頬を掻きながら本音を漏らす。

厄介な奴なら放っておけばいいのに。

α 性の人間は先程も述べた通り、生まれながらのエリートだ。社会的地位が高く、才能も群を抜き長けている為に、周りから一目置かれている。その分、悪く言えば近寄り難い雰囲気なのか、皆 α 性の人間からは距離を置いている。学園では生徒だけではない、教師もだった。生徒会長である美波は、志希が授業に出ないということが続いても、きつと教師から小声を言われることが無いだろう。寧ろ、関わると面倒臭い

と思われている筈だ。権力がある人間を前にしては、皆誰だって畏れを抱く。志希にとってはいい迷惑だったけれど、特別関わり合いたい人間なぞ居ない。

新田美波も例外ではないのに。

ふわりとした甘い残り香が志希の鼻孔を撫った。彼女を上手く突き放せないのは、自分でも気付かない内に、美波に対して興味を抱いているからなのか。……いいや、と首を振る。そんな筈はない。他人と関わると面倒臭いだけだ。

はあっと深い溜め息を吐くと、足元でカサリと小さな音が鳴った。靴に当たったそれを見れば、可愛らしい水色の巾着が床に落ちていた。ひよいと手に取り、中身を取り敢えず確認してみる。

「クスリ……？」

見れば、幾つかの錠剤が中に入っていた。

一つ、二つ、クスリに表記されている名前を見る。志希が今までに見たこともない成分だった。どうやら普通の風邪薬や鎮痛剤ではないらしい。きつと落としたのは美波で間違いないと思った。この教室で居眠りをする前は、床にこれが落ちていなかったからだ。それにしても、彼女は何かの持病持ちなのだろうか。

それなら、このクスリが無いと困る筈だ。届けてあげようかと、ほんの少しだけ迷う。

「いや、……めんどくさ」

数秒後、やはり届けるのを辞めることにした。本当に無くなって困るのならば、彼女の方から再び志希を探しにくる筈だ。志希は美波のクラスさえ記憶にしていなかった。それに自分が探しに歩くよりも、美波が志希を探した方が確実に早い。なんたって、志希がどこに居ても必ず見つけ出す執念の持ち主だ。

さて、あと一限をどうしようか。スマホの時計を見て、ぼんやりと天井を見詰める。また眠るか、歩くか、授業に出るか。どのみち、残り一

限だけならば出席をしても欠席をしても変わりはないけれど。

「……もう今日はいいや」

彼女と居ると毎回だ。美波が放つ甘ったるい体臭が鼻孔にいつまでも残って落ち着かない。この匂いは嫌いではない、嫌いよりも——
「つ……、」

志希は何故か、この教室に居座りたくなかった。

今夜は少し面倒臭いけれど、彼女に香水を作ってあげよう。あの匂いは、何故だか自分を変な気持ちにさせる。志希は巾着をカーディガンのポケットへ適当に突っ込んで、ゆっくりと静かな廊下を歩き始めた。



失敗をした。美波は生徒会室の椅子に座り、深く項垂れた。冷静沈着などと周りから言われている美波だが、実際はそんなことはない。割と挑発には乗り易い方であり、それが対志希になると子どもつぽく反発をしてしまう。

正直に言えば、勢いに任せて志希へ挑戦を叩きつけたのはいいものの、彼女に勝てる気が一切しない。秀才と周りから称えられていても、天才には敵わないということ在美波はこの学園に在籍していて痛い程に痛感していた。定期的に迫り来る試験には志希の言う通り、美波は一度も順位で勝てたことがない。あんなに教科書や問題集を解いて試験に對し万全な準備をしていても、ニアミスの一つはしてしまうし、難問だって間違ってしまうものだ。

「つ……、どうしよう」

いつも全教科満点を叩きだす志希に勝つ方法はない。あるのは精々、美波も全教科を満点で取り、引き分けに持ち込むこと。

しかし、それだと一番の目的である志希に言うことを聞かせることは出来ない。どうしたらいいのか考えあぐねていると、眉間に皺が寄っ

てしまっていた。

教師達には『一ノ瀬はもう放っておきなさい、開わるだけ君の為にならないよ』と口を揃えて、我が身の心配をいつもされている。エリートであり権力のある志希に、もし口煩く注意をすれば、いつ自分自身が社会的抹殺をされるのかと恐れているのだろう。

だけど、そんな理由で周りから距離を置かれて、違う目で見られるということは、美波にしたら凄く寂しいことだと感じた。生まれ持った才能は喜ばしいことだけれど、それを含めた全ての重圧から耐え切れるのかと問えば、そんなことはないだろうと美波は首を振る。天才で居続けるということは失敗をした時の反動が大きいと思う。自分に対して、周りに対しても。志希ちゃんだって、年相応に普通の可愛らしい女の子なのだ。

いつしか、美波は志希がふらふらと失踪を繰り返す理由を常に考えてしまっていた。この学園にいる生徒で、α性だと耳に聞いているのはほんの数人だ。α性の人間はやはり何かしら目立ってしまうし、雰囲気も格段と違う。志希のように、自分には授業が必要ないからと出席をしない者だって勿論いる。

だけど、不思議と志希はつまらないと言う割には学園に居続けるのだ。それは、つまり美波の想像と結び付く答えであり、

「やっぱり少し強引な方が良かった、よね……?」

志希は寂しいのではないかと。

ならば多少なりとも強引に、自分がその手を引つ張ってあげたいと。美波はお節介な気持ちを抱いていた。馬鹿みたいだという自覚はある。それでも、やっぱり彼女には学園で笑っていてほしいと強く想った。はあっと深く溜め息を吐く。自分が売った喧嘩だ。引き下がる訳にはいかない。ちらりと見た時計の針は、午後五時過ぎを指していた。

「いけない。そろそろ薬を飲まないと……って、あれ?」

制服のポケットに指を入れても、どうにも薬を入れた巾着がない。右

ポケットを見て、左ポケットを見ても、やはり無い。焦りながら必死で探しても鞆の中にも薬は無く、美波は焦る。自分が飲んでいる薬は少し特別なもので、専属の医師と薬剤師から調合された貴重な薬だ。それに値段も少々張る。再び薬を調合してもらうとなると、今月のお小遣いはあつという間に空になってしまっただろう。この時間から病院に向かつて、学園からだと距離が遠く閉まってしまう。

「ど、どうしよう……!」

手帳を開けば、とある予定日まで一週間とちよつとある。期末試験が四日後だとして、試験は無事に(結果は兎も角)乗り越えられるだろうけれど、果たして勉強に集中出来るのだろうか。

あの巾着の中には、きつちりと予定日までの薬が入っていたのに。

「あ……っ、」

はたと思いつき、移動授業で使った教室や体育館などを全て回ってみた。しかし、それらしい物は一切見当たらず、職員室の前に置かれている『生徒の落とし物ボックス』という箱にも届けられていなかった。

そうして、とうとう美波は諦めて帰るしかなかった。

しんと静かな教室でカリカリとペンを走らせる音、時折知らぬ誰かが咳払いをする声だけが耳に響く。ふあつと大きな欠伸をして室内の時計を見ると、なんと三十五分以上も残り時間がある。素早く問題を解き過ぎたらしい。志希は退屈そうに問題集へ落書きを始めた。

今日は美波が志希に威勢良く挑戦を叩きつけた日から四日が経った、期末試験の日であった。

暇だ。じっとしているのは退屈で仕方がない。かといって、大きな身動きをしなければ不正と見なされ、万が一にでも試験が失格になるかもしれない。つまらなさそうにペンを置き、諦めて目を瞑ることにした。

けれども目を瞑ると、一層自身の耳には誰かの咳払いや呼吸音が響き、とても煩い。志希は大衆が集まる場所が尤も苦手だった。α性の人間は、何も全てが良いことばかりではない。身体的能力が高いこと、即ちそれだけ凡ゆる器官も敏感であるということだ。

志希に至っては、一番優れている感覚は『嗅覚』だ。

その所為で、人が沢山集まる場所へはなるべく長居をしていたくない。こちゃこちゃとした人の体臭や様々な物の匂いが、志希にとつては苦痛で堪えられないからだ。すると、鼻を鳴らして確かめる。ああ、やつぱり好きじゃない。残りの時間も早く終わらないかにかやあ……。

盛大に机に突つ伏すと、鼻に僅かながらも違和感を覚えた。

「……!!」

瞬間、志希の心臓が早く打ち出す。

ドクッ、ドクッと心臓が暴れて落ち着かず、思わず顔を上げる。急にどうしたというのか。気分を有める為にぎゅつと握り締めた手が変に汗を掻き、段々と苛々してくる。……なんの匂い？ 疑問符が浮かぶ中、違和感は次第に増してゆく。甘ったるい匂いが徐々に、志希の鼻孔を侵

していった。周りを見渡してもおかしな物などは置いておらず、生徒達も必死に下を向いて問題用紙と睨めっこをしている。フツの人間にはどうやら気付かない匂いらしい。

でも、この匂いはどこかで嗅いだことがある。割と最近、というよりも頻繁に嗅いでいるであろう、とある彼女の匂いだ。しつこくあたしに付き纏うお堅い生徒会長サマの匂い。五感の中では最も嗅覚に優れているあたしが間違う筈はない。

しかし、どうやら彼女は志希と同じクラスではないようだ。とうとう鼻が馬鹿になったかにかや？

首を傾げつつ、もう一度だけ鼻をすんと鳴らすと、

ドクン

ドクン

ドクン

「は……っ、あ」

先程よりも強烈に濃い匂いが、彼女を襲った。

じわりと額から汗が滲み、ぼたりとテスト用紙に滴り落ちる。くらくらと回る視界の中、本能的に身体が危ないと感じた志希は再び机に突つ伏して固く目を閉じた。どうにもこの匂いは、自分をおかしくさせる。なにこれ……っつ！ なんの匂い……!!

必死に答えを考えても、頭に思い浮かぶ匂いはたった一つしかない。これだけ癖のある甘い匂いだ。それにしても、教室が違ふ彼女の匂いが自分のところにまで届くのは変だ。

ふと思ひ出す。この試験が始まる日まで、彼女とは一度も会っていなかったことを。何故なら試験を控えた日が近付くにつれて、自習になる授業が増えるからである。自習ならば尚のこと、わざわざ出席するのは志希にとっては面倒臭く、この四日間は学校にすら来ていなかった。

その所為で、志希はあの巾着を彼女へ返せずにいた。しかし、これは返す前に調べるがありそうだと。

甘・っ・た・る・い・匂・い・と、ク・ス・リ・と、美・波・ち・ゃ・ん・

本日の試験は、もう後ろに控えている教科が無い。このまま体調が悪いフリをして帰ってしまおう。どうせテストは満点だ。教師へ適当に声を掛け、教室を後にする。

志希はくすりと笑い巾着を取り出した。これはなにやら面白いコトが起きそうだと、足早に自宅へと戻っていった。

■
□
■
□
■

浅く繰り返される自分の呼吸が異様に煩く感じた。

身体のうちこちが疼いて堪らない。巾着を落としたあの日から、美波は薬を飲めず、身体に支障を来たしていた。風邪をひいて熱を出した時のように身体が火照り、熱くて苦しい。瞳からは涙がじわりと滲み出てきて視界が霞む。最悪なことに、美波は試験に集中出来ずにいた。

しかし、今日はとても大事な期末試験の日なのだ。

集中しないでどうするの！ 美波は心の中で己に喝を入れる。

それに、予定日までには日数がある筈なのだ。まだ大丈夫だと思いたい。試験が終わったら、早く病院へ行こう。お小遣いは厳しいけれど、もうそこそこではない。

美波は気を入れ直し、頭の中で問題文を読み始めた。そうして、次に答案用紙へ回答を記入しようとペンを握る。……あれ？

何故だか、一向に力が入らない。指に力を込めようとしても、震えて上手に文字や数字を書けないのだ。どうしようと美波は焦る。ぐつと無理矢理にでも指に力を込めようとした途端、ぞわりと背筋が激しく震

えた。美波の感情とは裏腹に、本能はもう既に試験どころではない状態だったのだ。頑張らなくちゃ駄目なのに。大切な志希ちゃんとの勝負なのに！

火照る身体を誰かに鎮めてほしい。

早くお家に帰りたい。

ぐちゃぐちゃに——私を××して。

はつと我に返った時には、美波の手からペんが転がり落ちていた。駄目なのに、いけないことなのに。美波の思考が、感覚が、身体が、どうしたって性の快楽へと誘ってしまふ。

薬を飲まないでいると、こんなに酷いものの……っ！？

数日前の自分を叱ってやりたかった。こんなに予定日の前兆が酷いのならば、我慢をせずに病院へ行けば良かったのだ。幾ら診察代や薬代が高くとも、今の状況よりは遥かにマシだろう。荒い呼吸音と気持ちを鎮めようとする焦りは、次第に諦めへと変わっていった。今の美波にはペンを握る余裕さえ残っていない。

そうして数十分後。

美波が幾らも問題を解けずにいる中、とうとう試験の終わりを告げる鐘が鳴ってしまったのである。

「なに、これ……？」

登校をして一番に志希の目に映ったのは、見るにも堪え難い無様な彼女の成績だった。あれだけ自分に大口を叩いておきながら、彼女の名前は下から数えた方が早い位置にあるのだ。なにかの間違いではないかと、思わず二度見をしてしまった。

例え、志希がどんなに周りへ興味が無くとも、常に自分の隣に並ぶ名前が同じであれば嫌でもその人の名前を覚えてしまうもの。

そう、美波ちゃんはいつもあたしの隣だったのに。

一体なにが起きたのか。何気なく担任に訊ねてみれば「試験の日は風邪をひいて具合が悪かったそうよ」と聞いた。そして「一ノ瀬さんは新田さんと仲が良かったの？」と逆に訊き返された。余計なお世話だ。柄にもない質問をしたのは、志希自身が充分に感じている。誰かのことを気に掛けるなんて。適当にお辞儀をし、職員室を去る。カーディガンに忍ばせた巾着をすつと取り出し、中にあるクスリを一つ手に取った。

正直、試験に関して志希は納得がいかなかった。最悪なことに、この成績発表を目の当たりにして、美波に抱いていた疑問が確信へと近づいてしまったからである。志希にとって、あまりにもそのことには興味が湧かなかったので、今まで深く考えたことがなかったけれど、もし本当ならば——これから彼女に近付くのは危険過ぎる。自分自身の首を絞める行為にもなり兼ねない。風邪ねえ、ぼつりと呟き巾着を仕舞う。

「まあ、いつか。結局はメンドーな人間だっていうのには変わりないんだね、美波ちゃん♪ にゃはは」

目を通した本には、本能と本能が引き寄せられて……とか書いてあったなあ。ふむと志希は思索つつ、脚は彼女が居るであろう生徒会室へふらふら向かう。

でも、やっぱりこの時に止めておけば良かったんだよね。あたしに負

け戦を申し込んだ美波ちゃんも愚かだったけど、同じくして抗えないものに抵抗しようとしてみたあたしも充分似たようなものだよ、全く。

■□■□■

「う、……っ、あ、」

——バサバサバサツ。盛大な音を立てながら、机の上に置いてあった教科書やプリントの山が崩れ落ちてしまった。

日に日に、とある予定日が近付くに連れて、美波の理性が限界を迎えようとしていた。否、既に限界を迎えていた。タイミングの悪いことに専属の医師は一週間だけ外国に行っていると言われ、薬剤師も共に不在だった為に、薬が飲めずにいたのだ。

普段の美波は学園の規律を乱さず、全校生徒の模範となる真面目な生徒会長であるのに今回の試験で初めて、あまりにも酷い成績を残してしまった。その成績を見た教師達からは、美波のただならぬ雰囲気や体調を心配し、慰める言葉を投げ掛けた。他にも、体調が悪かったのなら休めば良かったのにと叱る教師もいた。なにせ、美波は学年トップの志希に次ぐ、成績上位の生徒だったからだ。

今日は沢山の友人から心配の声が掛けられ、美波はずっと苦笑いをするしかなかった。心配をしてくれることは有り難かったけれど、今の自分には気がおかしくなりそうなのだ。友人が何気なく触れる肩や、優しくぽんと叩かれた背中さえ、今の美波には堪らなく感じてしまう草草だった。気を抜くと、理性がどうにもかなくなってしまいそうなのだ。廊下を歩く知らない生徒にでさえ、縋り付きたくなる程に体が火照り、美波をどうしようもなくさせる。

それに多分だが、美波の出すフェロモンとやらの惹かれ、怖い目で見詰めてくる生徒も何人か居た気がする。目に見えない視線がチクチクと身体中に刺さり、気持ち悪くて仕方がなかった。

そうして、逃げるように向かった自分のもう一つの居場所、この生徒会室で美波は身体が落ち着くまではここに居ようと思っていたのに。力が抜け、がくりと姿勢が崩れる。

「や……、っ」

ぞわりと身体を這ってくるような気持ちの快い寒気は、治まるどころか次第に増してゆく一方だ。これでは落ち着くどころか歩くこともままならない。火照りが鎮まってくれなければ、家に帰ることさえ困難だというのに。ふるりと震える肩を両手で支え、美波はべたりと床に座り込んでしまった。知らなかった、こんな自分を。

この属性は十代後半に発症すると聞いていたが、まさか自分がなってしまうなんて、誰が想像していただろうか。世界にはほんの一握りの人間しか居ないと、いつぞや読んだ本でも記憶している。発症をしてから薬を飲み忘れたことなど一度もなかった美波には、この症状がこんなに酷いとは想像もしていなかった。……なんとかして、この火照りを鎮めなければ。

でも、どうやって？

答えは簡単だ。

今この生徒会室で、美波自身が性欲を鎮める他に手段はない。

そもそも、他の人に鎮めてもらうなど怖くて出来るものではない。そろそろと震えながら、美波は制服の中に指をゆつくりと侵入させてゆく。自分で慰めることは恥ずかしながら何回かしたことがあるけれど、自宅以外では流石にしたことがなかったのに。恨むのならば、自分のこの体質を恨むしかない。

いよいよ覚悟を決め、下着の中にも指を入れようとした時、不意に扉の方から声が聞こえた。

「あれー？ やっぱり、そうだったんだ」

——コンコン。ノックを二回。

既に開けてしまった後で行ったノックは何の意味も成さない。咄嗟に慌てて自分を抱き締めるように美波は防衛をした。このはだけた姿では言い訳の仕様ががない。その姿を眺め、志希はケラケラと笑っていた。

「し、志希ちゃ……っ！」

「無用心じゃない？ 鍵も掛けないなんてさ。襲われちゃうよ？ この学園中の奴等に。美波ちゃんの甘ったるいフェロモンが廊下にまでぶんぶん漂ってるもん♪」

そう言って、志希は静かに内鍵を掛ける。軽快に靴音を鳴らし、美波の方へと近付いてきた。

なんで？ どうして？ 焦る美波に、志希は巾着を差し出した。投げ捨てるという表現の方が合っていたかもしれない。ぞんざいに渡されたそれを見て、自分が落とした巾着を志希が届けてくれたのだと、やっとな理解した。

「あー……なにこれ。ホントですっごいね！ **Ω(オメガ)が発するフェロモン**はさ。氣イ抜いたら、理性とびそー」

「あ、あの、ありがとう。志希ちゃん、これ……」

「べつに。今度からは氣を付けなよー？ 無いと困るやつでしょ、それ。成分を調べたら抑制剤らしきものだったから、まさかとは思ったけどね」

「……うん」

「まあ、多少なりともビククリしたけど。真面目でお堅い生徒会長サマサマの美波ちゃんが、お色気ぶんぶんに漂わせるΩだったとはねー」

「つ……、志希ちゃん!!」

聞きたくない言葉だった。例え、それが悪気のない言葉だったとしても、とうの美波は充分気にしていたからだ。だが、こんなものは殆ど八つ当たりに近い。志希の言葉を叫ぶようにして止めた美波は、はっと口を抑え思わず顔を逸らした。

こんな自分にはなりたくなかったのに！

こんな色欲を求める自分を知りたくはなかったのに！

好きで、こんな身体になった訳ではないのに……!!

そう考えたら、美波は悔しくなり涙を流していた。

確かに、志希の言う通りなのだ。気分が昂ったからとは言え、学園内で慰めようとしてしまった自分が恥ずかしい。ぼたり、ぼたりと、止め処なく溢れ出る涙に志希は罰が悪そうな顔をした。

「あー……もうっ！ 頼むから泣かないでよ、美波ちゃん。……あたしもいま、結構キツいんだっつの」

いつの間にか、志希は苦しうに顔を歪めていた。はっはっとう荒い呼吸と何かを抑えている顔は、まるで今の自分と同じように映る。美波は心配そうに彼女の頬に触れてみる。するりと手を下にずらし、首筋を触ると酷く汗ばんでいる様子だった。心配だ、とても。

「はっ、あー……、も、限界」

「え？ ……きゃあ!!」

急激に、ぐらりと視界が揺れる。

首筋に触れた美波の手を志希はがっちりと掴み、そして、押し倒してしまっていた。自分の頬の涙と志希から滴り落ちる汗が混じる。吃驚して固まっていると、彼女のぬるりとした生温い舌が強引に口内へ侵入してきた。吸いつかれるように舐められ、今にも舌から食べられてしまいうような勢いだ。

「っ、んう……っ、あ、はあっ、」

「し、っ……、！ んっ、あ……っ」

ぐぐつと彼女の肩を押し返そうにも、どうやら自分の気持ちとは裏腹に力が抜けていってしまい、抵抗がままならない。頭では受け入れては駄目だと警鐘が鳴り続けているのに、身体では志希の舌が気持ちいい

いと感じてしまっている。

やつとのことで解放された時には、美波も志希も信じられないような顔をしていた。あの志希に自分は口づけをされ、感じてしまったのだ。その事実が信じられずに、ふいっと顔を逸らす。おかしい。そう分かっているのに、やつと身体に与えられた快感に抗えきれずにいた。

「ふ……っつ！」

ねっとりとした舌が、耳に侵入してくる。ゾクリ、一段と大きく震えた美波の胸元に志希はゆっくりと手を添えてきた。身体が熱くて堪らない。抵抗をしなければ駄目なのに、生徒達の模範である自分がこんな場所で規律を乱す行為をしてはいけないのに、もう美波には抵抗をする気力も、理性も、僅かも残ってはいなかった。制服の中に、いよいよ志希の手が入ってくると美波はぎゅつと目を固く閉じた。

とあるコトについて調べようと、志希は図書館へ足を運んだことがある。ずらりと並ぶ書物から引つ張り出した、埃臭く古い本にはこう記されてあった。やたらと古いその本は、難しい言葉ばかりが長々と書き連ねてあり、数分足らずで本を読むことは放棄した。三分も睨めっこをただけ寝てほしい。

でも、まあ肝心な部分は知れたので問題はない。

『発情期のΩのフェロモンを前にしたαはその性質に抗えず、そのΩを己のものにしたくなる。尚、αがΩの項に噛み付けば、契約をしたとみなされ【番】となる。αとΩが番となる時、本能と本能が惹かれ合うような強烈な衝撃を感じる。また、この二人が離れることは困難となる』

しかも、どうやらΩのフェロモンはαが番としてその人を選べば、その後はずっと抑えられるらしい。もつと正確に言えば、番になったαに向けてしか、そのΩの人は誘惑をしなくなるのだ。誰かと番になつてしまえば、誰彼構わずフェロモンを発して誘惑をし続けるのは防ぐことが出来る訳だ。志希は必死に理性と闘う中で、いつぞや目を通した本の内容を思い出していた。

「頼むから……抵抗してよ、美波ちゃん」

くしやりと志希は前髪を押し潰す。珍しく余裕がなかった。

当たり前だ。舐めてかかった志希にとつて、まさか本に書いてあった通りに、美波の発するフェロモンがこうも絶妙に自身の理性を揺さぶってくるとは思ひもなかった。まさか、こうして箍を外そうとしているんだなんて、数分前の自分には予測もしていなかった。

「そ、んなこと、言われてもつ、……し、志希ちゃんこそ、あっち、行

つてよ……っ。はあつ、……あ、お願いだから、触らないで……っ、」
「……それが出来たら、苦勞しないっつ」
ちつと舌打ちをする。

自分の気持ちが分からないのだ。美波のことを放っておけば良かったのに、それが出来ずにいた。それに今頃、志希が美波を見つけていなかったらどうなっていたとか。廊下にまで漂っているこのフェロモンに、彼女自身が気付いていないことが危ないのだ。他のαやβの人間が惹き寄せられ、理性を忘れた人間が美波を襲っていたら……。

そう考えると何故だか腹立たしい。別に彼女が他の誰とどうなるうが、自分には一切関係ない筈なのに。もしもそのことを想像したら心が騒いで落ち着かない。ホントにホントに！ 別に、美波ちゃんなんてどうでもいいんだけど。

「あ……っ、」

「なに、その反応？」

びくんと小さな声を上げて美波は羞恥に堪えていた。

いつの間にか志希の指は、美波の胸の突起へと辿り着いていたようだ。なんだか、むかつく。いつもはあたしに対して、自業自得だといえ怒った姿しか見せたことがなくせに。そう思ったら、段々と悪戯心がむくむくと湧いてきてしまつて。

もつと困らせたい。もつと、その顔が見たい。

きゅつと指で突起を摘まむと美波は敏感に反応をした。

「んう……、や、だ、やだやだ！ しきちゃ……っ！」

「……はあ？ あのだ、そのままだと美波ちゃんこそ辛いんじゃない？ 大体、他の人に襲われない訳？」

「つ……、」

「フェロモンをぶんぶん漂わて、おまけに内鍵も掛けずに自分で慰めようだなんて、危機感が足りなさすぎ」

「それは……！」

「……うるさいなあ」

やだとか嫌とか、自分を拒絶するような言葉を美波から聞きたくないと唇を塞ぐ。無理矢理にでも絡めた舌を今度は素直に受け入れてくれたようだ。毎日のように自分を追い掛けてくる美波ちゃんは、がみがみと煩いけれど、今はもう何も聞きたくない。吠えるよりも、啼いてほしい。甘ったるい匂いと可愛らしい声で、あたしを馬鹿にしてほしかった。

はやく、はやく、美波ちゃんをあたしのモノにしたい。

「つ……、は？」

「し、きちゃ……？」

つうつと舌を引き抜き、美波の顔をまじまじ眺めると、いよいよ本格的に自分の理性が崩壊しかけていると気付く。ぴたりと動きを止めたまま固まった志希を見て、美波は心配そうにまた頬を触れてきた。そんな余裕があるのなら、自分のことを振り払って逃げてしまえばいいのに、何故そうしないのだろう。

基本的に、志希は人の気持ち信じてはいない。近付いてくる人間には鬱陶しさを感じないし、背後に見え隠れする相手の様々な感情は苦手だ。元々、人と関わるのが好きではないし疲れてしまう。一人でふらふらと気儘に歩き回っていた方が楽だ。

それなのに、新田美波という女性だけは志希を探しては付き纏う。

「しきちゃ……、！　っ、あ、ねえ！　どうし……っ、」

「うるさいっぱ」

ああ、考えが混合して全部がメンドーだ。

だから、どうしたというのだろう。イコールでナニかに結びつく訳で

もないのに。短絡的思考をすることが一番嫌いだ。

本能と本能が惹かれ合う？

運命の相手を前にしては抗つても無意味って、ねえ。

だけど、これは――

こんな暴力的な感情は、絶対に恋なんかじゃないよ。

ねえ？　そうでしょ、美波ちゃん。



いつも不機嫌そうな顔しか見たことがない美波には、とても珍しいものを見ている気がした。苦しうに顔を歪めたり、焦ったり、何かを深く考えたりしている志希はきつと抗っているのだろう。自身が発するΩのフェロモンに。これは多くの人間を魅了すると聞いている。医師にも注意をされた程だ。

まさか、こんなに酷いものだとは自分も、多分志希も想像をしていなかっただろうけれど。医師や他人から見聞きした内容では、その中でもひと際強く惹かれ合う人間がいるらしいのだ。それは本能と本能が惹かれ合う程の強烈的なもののようで、本人達がどんなに拒絶をしても抗えないらしい。

謂わゆる、運命の相手ということだ。

私と志希ちゃんが、果たしてその相手なのかなんて分かる術もないけれど。

「し、きちゃ……っ」

「もう、あたしが抱くから黙ってて」

つい先程までは迷いを抱いていた様子だったのに、今は迷うことなく、志希はきっぱりとそう告げた。

ひとりと肌に這わせられた指は冷たかった。美波の火照った身体に

はとても心地良く、熱を融かされる感覚に陥る。つつと舌で首筋を舐められると、全身の力が抜けていくようだった。熱を奪ってもらえるならば、もうなんだって良い気がした。

志希は優しく、美波の指に自分の指をそつと絡め、握る。ぼうつとした目で志希を見ると、やっぱり相変わらず不機嫌そうな、難しそうな、変な表情をしていた。いつも、いつも、志希ちゃんは私に対して不機嫌だ。

――美波は、志希のことがずっと前から好きだった。

だから、彼女が自分のことを毛嫌いしていても放っておけず、その著の透き通るような瞳に、いつか自分を映して欲しいと願っていた。けれど、志希はα性の人間だ。立場上は釣り合う訳もなく、学園に在籍している間だけ、ただ傍にいたいと願っていただけに。まさか、こんな形で志希と向き合うことになるなんて、喜ぼうにも素直に喜べない。幾らなんでも、あんなに自分を嫌っていた志希が、美波を好きで抱いている訳ではないことぐらい分かっていた。

一年前に発症をし、自分がΩ性だと発覚した時は吐き気が止まらなかった。予定日が来ると、どんな場所に居ても、薬を飲んでいても、身体が火照ってしまう。性を欲してしまう。ぎりぎりで抑えている症状に薬は絶対に手放せなかった。色欲に塗れた自分に對し、とても嫌悪感が湧いたものだ。

「っ、ひっ……く、やっぱり、やだ、し、しきちゃ、」

「……………みな、」

「私のことっ！　好きじゃない、なら、っ、……触れない、で、……抱かないで、っ、お願い、志希ちゃん……っ」

わんわんと泣きじやくる美波を見て、どう思ったのだろう。常に冷たい態度しか取らない志希は、それでも行為を続けるのだろうか。いつだ

って志希の行動は、美波には理解が出来ないし予測もつかない。むすつとした表情のまま、志希は暫く何も言わなかった。少なくとも美波が泣き止むまでは、触れようとしてもしてこなかったのだ。

「退けて、志希ちゃん……」

「……………でも、美波ちゃんはおたしに逆らえないよね？　試験に勝つたら、美波ちゃんは何でも一つあたしの命令を聞いてくれるんでしょう？」

深く息を吸った志希は、美波を無理矢理うつ伏せにさせた。

その言動に、何故だかとても嫌な予感がする。それはきつと、どんな命令よりも残酷で一生自分の身体を志希にコントロールされてしまう、堪え難いものの筈だ。

待って！　そう言う美波の言葉が出るよりも早く、志希は美波の項をさりと撫でて。

躊躇うことなく――噛み付いた。

「……………っ!!」

自分では見えないけれど、番となった暁にはαが付けた噛み痕はずうつと消えることがない。

それは美波が恐れていたこと。何より残酷なのが、番になったとしてもα側の人間から一方的にその関係を解除されることもあるのだ。仮にもし、そうなった場合を考えて不安で体を震わせた。

もし、そうになったら？

美波はもう誰とも、番になることが許されないのである。番になってしまふと最後、もうその相手と美波の場合は志希としか今後一生愛し合えないのだ。この残酷な縛りを知っていて番にしたのだろうか。志希の気まぐれなお遊びならば、もう美波の人生は終わった同然だ。

「……美波ちゃん、今はちゃんと抱かないから。目を瞑って、夢を見た

気分できて」

とびきの甘い、優しい声で。志希はそう美波の耳許で囁く。

今まで一度も聞いたことの無い声音だった。普段のつんとした声が嘘のように優しい。美波は言われた通り、ゆっくり目を瞑る。すると、冷たい指が再び胸の突起に触れられ、思わず身体が跳ねてしまった。かるく摘まれ、背後から背中を舐められる。美波はそれだけで軽く達してしまった。

「下も……触るけど、そのまま瞑ってて。大丈夫、今この生徒会室では何もなかった。美波ちゃんは夢を見ているだけだから、」

「んっ……っ、んっ、あ、ああっ！」

充分に湿り気を感じた美波の秘処へ、淫らに水音を立てながら志希はゆっくりと指を沈めていく。ぐぐつと異物を挿れられた圧迫感など無いに等しかった。それだけ、美波のソコはずっと可愛がられることを待ち望んでいたからだ。

「し、しきちゃ、……っ、あ、あ、や、やだ！ は……っ、」

「大丈夫だから。今はただ、熱を冷ますだけだから」

今この静かな室内には、美波の嬌声と秘処から溢れ出る愛液の音しか聞こえなかった。くちゅり、くちゅり、愛液は止め処なく溢れ、羞恥心を一層煽る。そうして、何度目かの指の抽送後に美波は背中を大きく反りながら、とうとう志希の指で果ててしまった。

途端、くたりと志希の身体が覆い被さってきた。どうやら、何もしていないのに美波の乱れた姿を見て果ててしまったらしい。

「し、志希ちゃん……？」

「はあっ……、はっ……。あたしも、っ、防止剤を飲んできて……、正解だったかにやあ」

悔しそうに笑う志希のカーディガンから、コロリと何かが転がり落ちる。それを美波はただぼんやり見詰めていた。志希が自作した『対Ω用のフェロモン防止剤』の瓶らしい。美波の抑制剤を元に調合したと整

わない呼吸で、途切れ途切れに説明をした。

そうして、志希はぱったりと充電が切れたかのように、美波の背中の上で眠りに就いてしまったのである。

コツコツと忙しく靴音を鳴らしながら彼女を探す。

あちらこちらと学園内を探してみても、甘い匂いが近付いては遠ざかり、近付いては遠ざかり、朝からずうっとその調子で同じことが繰り返されてきた。ようやくと見つけたお目当ての人物は、最終的にはいつもの定位置の生徒会室の椅子に、体育座りで小さく背を丸めて項垂れている。……ああもうっ。やっと見つけたよ、美波ちゃん！

「……なにしてんの？ ネコの真似？」

「し、志希ちゃん！」

ふわりと香る甘い匂いの美波を頼りに、一日分の運動をしたと言っても過言ではない。普段は運動をしない志希からしてみたら、なので実際はそこまででもない（程に歩き回ったのだ）。

要は、昨日の出来事から志希は美波に避けられていた。

とある出来事の後。——志希が美波を番として選び、噛み付き、一方的に抱いた後、自身の体は理性と体力の限界を迎え、いつの間にか気を失ってしまったらしい。目を開いた時には白い天井がぼんやりと映り、そこが保健室だというのが理解したのは数分経つてのことだった。気怠い体をのそりと起こし、眠気を飛ばす為に頭をかくく振ると、徐々に何があったのかを思い出す。布団から起き出ると乱れた服は綺麗に整っており、あ後は多分彼女が色々と処理してくれたのだらうと容易に想像はついた。

まさか、自分が意識を失う程に興奮をしてしまったなど予想外だったけれど、もつと予想外だったのは賭けに勝った志希が無理矢理にでも美波を番に選んだことだった。

「はあ……。あのさ、昨日の今日だからっていくらなんでも避け方が露骨過ぎじゃない？ 探すの疲れた——」

「う……、それは、だ、だって」

目線を合わせようとしないうまま、しどろもどろになる美波に対し、志希はちよっぴりむかついて。そして、自分自身にもむかっていた。Ωのフェロモンに屈伏したことも然り、更に言えば美波が今日自分のことを探しに来ないこともむかっていた。……これだとまるで、あたしが美波ちゃんに探しに来て欲しかったみたいじゃん。

「……志希ちゃんは体調、大丈夫？」

「別に、平気だけど。……美波ちゃんは？ てゆーか、あたしの心配より自分の心配をしなよ。放課後は追試なんでしょ？」

「私は薬を飲んだから昨日よりは割と平気になったかな。追試は大丈夫、頑張るよ！」

顔を合わせてからやっつと、少しだけ笑みを見せた彼女にホッとして安心する。昨日のように自分に対して泣いている姿を見せられてしまうと、今までみたいに邪険にするのも心が痛む。今は志希の方から、わざわざ美波に会いに来ていた訳だけれど。

「志希ちゃんは、何か私に用事でもあったの？」

「……んにや、」

特にはなかった。そういえば、なんでこんなにあたしは必死になって美波ちゃんを探していたんだろ。今度は志希の方が言葉に詰まり、その姿を見ていた美波は不思議そうに首を傾げている。

探し回っていた理由は、いつまで経っても志希の鼻孔から美波の甘ったるい匂いが抜けなくて落ち着かなかったからだ。知らない内に、足が本体の美波を探しに動いていた。

「うーん……？ ふんふん、なるほどねえ」

自覚がない内に、あたしは美波ちゃんを求めてしまったという訳だ。全く、一体どこまでがフェロモンの影響なのやら。志希は無言のまま踵を返す。

「あつ！ ちよっつ、ちよっつと、志希ちゃん!？」

「帰るー。またね、美波ちゃん」

「帰るって……まだ授業は残ってるよ!」

ぐっと袖を掴まれ、志希は思わず美波の腕を見詰めてしまった。大体にして、今日はあたしを避けていたのは美波ちゃんの方なのに、何故こゝうも授業のことになると真面目スイツチが押されるのだ? この生徒会長サマは、黙ったまま袖の方をじっと眺めていると、美波は顔を紅くさせながら気不味そうに慌てて手を離した。

ふと思い返してみると、美波はいつも志希に対して遠慮無しに叱りには来るけれど、志希から近付くと慌てふためいたり、逃げ出したりしてしまう。からかいザマにした、いつぞやの頬に口づけをした時も怒っていたような記憶があった。

「ねえ、美波ちゃん。キスしてもいいー?」

どうせなら、今日は振り回されたのだ。少しくらいなら自分だって困らせてもいいだろう。だから、これは志希にとっては單なる好奇心から来る質問。別段、これと言って深い意味など無ければ、いつもの美波をからかう為の冗談だった。その筈だったのに、

「志希ちゃんは……、私のこと、好きじゃないでしょう? 好きじゃないのなら、無理してこんなことをする必要なんてないと思うよ」

「じゃあ、美波ちゃんはあたしのことが好きなの?」

「え……?」

間髪を入れずに訊き返すと美波は押し黙る。

好きでないのなら駄目ということは、好きならば了承を得たということになるのか。ずいっと近付き美波の顔を覗き込むと、頬を真っ赤にしながら目を逸らされてしまう。……なるほどねえ、ふーん?

「もしかして、昨日は嫌がりながらも実は嬉しかったりした?」

「……っ!」

「へえ? ……アタリかあ!」

しかし、こんな人間をねえ。別に自己評価が低い訳ではないし、寧ろ高い方の志希ちゃんだけれど、一体どこに惹かれたのか謎だなあ。真面目な美波ちゃんからしてみたら、あたしみたいな人間は放っておけない主義なのかにや?

じゃあ、抵抗なんてしなきゃ良かったのに。そう軽々しく口にした瞬間、美波は志希の肩をぐっと力強く押して距離をとった。

「み……、」

「志希ちゃんなんて……!」

ああ、こりややばい、と思った時にはもう遅く。

二回目に見た彼女の泣き顔には、流石に罪悪感を覚える。

「志希ちゃんなんて、っ、だいつくらい……っ!!」

そう吐き捨てて走り去る美波に、ただ立ち尽くすしかなかった。どれも志希にとって特別な意味などなければ、彼女を怒らせる気など一ミリ足りともなかったのに。

『大嫌いだなんて、初めて言われた言葉だった。』

当たり前だ。志希にとっては好きにも嫌いにもなられる程に、今まで深く関わってきた人間など居なかったのだから。これからも関わる気は無かった筈なのに、ずけずけと自分の中に入ってきた彼女は、自分が近付くと逃げてゆく。受け入れてしまったら、絶対に面倒臭くなるに決まっている。

それなのに、チクリと痛む胸が志希の表情を歪ませた。

「あー……もうっ! ホンット、美波ちゃんのクセに……生意気」

今日はずっと美波を探していたのだ。

あの志希が美波を朝からずっと諦めずに探して、やっと見つけたというのに。泣かしたかった訳ではないんだけどなあ、ぼつり咬いてぞんざいに椅子へと腰を下ろす。わしゃわしゃと頭を掻き、今日一番の深い

溜め息を吐いた。先程まで此処にいた残り香が一層と後悔させた。志希は今、確実に美波の言葉によってショックを受けていた。

■
□
■
□
■

始まりは、なんてことはない普通の日だったと思う。

放課後はいつものように生徒会の業務をこなし、やつとのこと終わったので帰宅しようとしていた時だった。運悪く担任から雑用を頼まれてしまい、化学準備室へ明日の授業に使う道具を取りに向かった夕方だった。

ふと、隣室の実験室から蛍光灯の光が漏れていて、下校時刻が近いというのにまだ残っていた生徒がいたのかと、美波は扉のガラス越しからさり気なく中を覗いてみたのだ。部屋は六つある蛍光灯の内、一つだけが点灯していた。灯りが少ない所為で大分暗い。じっと眺めると、自分の気配に気付いたのであろう、とある少女は手の動きを止めて視線だけを此方に向けた。

わわっ！ 焦って固まると、少女は美波に興味が無かったようだ。

遠くから眺めた表情からは何も掴めなかったけれど、きつと彼女の世界には美波のことなど眼中になく、そもそものが無に等しいものだったに違いない。何故なら、彼女の瞳がすぐに目の前にあるビーカーへと移ってしまったからである。実験にしか興味がないような感じを受けた。美波は何かいけないうのを見てしまった気分になり、その場から逃げ出すように担任の元へと戻っていった。

『一ノ瀬か……あいつ、まだ居たのか。新田、二度手間で悪いのだがあいつにそろそろ帰宅するように伝えてくれないか？ あと少しで下校時刻になるだろう』

彼女のことは教師達から絶えず聞いていた噂の問題児、『一ノ瀬志希』という天才少女だった。海外へと留学をし、飛び級をするもつまら

なかったからという理由で帰国をしたという子らしい。聞けば、化学については特に専門分野としており、天才並の知識があるとかなんとか。しかし、先程のこともあり美波は躊躇ってしまった。別段これと言った人見知りではないし、基本的に分け隔てなく人へ接することが出来る。だが、なんとなくだ。本当になんとなく、志希の雰囲気が得意ではなかった。この子と私はきつと合わない、そう感じた。

だけど、頼まれてしまつては仕方がない。

再び実験室へと訪れると、彼女は既に実験の片付けをし始めていた。水道で手や器具を洗っている。これなら、声を掛けなくても大丈夫なのではないか。そう考えているとまた気配を察知したのか、彼女はふと顔を上げて此方を見据えた。

「ん？ ……ああ、さつきの子かあ。ナニか用〜？」

「えっと、先生がそろそろ下校時刻だからって。……呼びに」

「りようかい。見ての通り、もう帰るよ」

にへらと笑った志希に美波はすつと肩の力が抜ける。拍子抜けをしたと言うべきか。先程のドア越しの志希は真剣そのもので、それだけ実験に集中していたのだらうけれど、ビーカーを見詰める彼女の瞳が鋭利的な刃のようで、正直に言えば少しだけ怖かった。

それなのに、今は一変して柔らかな雰囲気へと変わっている。美波はホツと胸を撫で下ろした。何気なくテーブルの上をちらりと見ると、可愛らしい小瓶が置いてある。彼女のものかな？

それに、この実験室の扉を開けた時に気付いたけれど良い香りが漂っている。なんの香りだろう。女性らしい、甘い香りだ。美波がきょんとしていると、その姿に気付いた志希がくすりと笑った。

「気になる？ それ」

「……うん。この部屋、良い香りがするから。これは香料か何か？」

「あたしが調合した香水。良かったらあげるよ」

「えっ、いいよ！ 折角作つたのに」

「香水は沢山持つてるから別にいい。きつとキミに合いそうだし、その匂い♪　　そういやキミ、名前はなんていうの？　ていうか、うーん……？　　ナニかでキミの顔を見掛けたことがあるような……」

「？　　……あ！　　もしかして生徒集会じゃないかな？　　私は新田美波^{にったみなみ}この学園で生徒会長をしているの」

ああ！　　と納得の声をあげた志希は記憶が合致したようで、なるほどねえと笑っていた。……それよりも、

「な、なんか距離が近くないかな？　　い、一ノ瀬さん……？」

「んん？　　志希でいーよ、美波ちゃん。なんだかキミは良い匂いがするね♪」

すんすんと鼻を鳴らしながら首筋を嗅がれ、慌てて美波は志希を引き剥がす。ケラケラ笑いながら鞆を掴み、またねと実験室を去っていった彼女は終始マイペースだった。会う前の苦手意識とは違っけれど、やっぱりなんだか彼女は苦手だ。苦笑いをしながら志希が去った扉を見詰める。おまけに、ちよっぴり変わっている、かな。

呆気にとられつつもテーブルの上に残された小瓶を取り、掲げて見てみる。光が当たった小瓶の中身は、透き通るような着色の液体が詰まっていた。その色は、まるで先程の彼女の瞳のようだ。ぼんやり見詰めた小さなそれが、志希の分身のような物に見えた。

「……………綺麗」

思わず呟いた言葉にハツとして口を抑える。

これだと志希のことを綺麗と言っているみたいではないか。美波の感想は単純に香水のことだと、何に弁解をする訳でもなく頭をぶんぶん振る。そうして、慌てながら実験室の鍵を閉め、美波は再び職員室の方へと戻ったのである。

それが彼女、志希ちゃんと私の初めての出逢いだった。

・ ・ ・

「はい、時間です！」

追試を終える声が聞こえ、美波は安堵の溜息を吐いた。

残り時間には割と余裕があったし、出来も充分だろう。採点はまだ全然なくとも、安心を得られる程度の手応えはあったので大丈夫な筈だ。それにしても、懐かしいことを思い出したなあと筆記用具を片付けながら思い出す。昨日今日と、志希の前では随分と取り乱してしまっている自分に恥ずかしくなりつつも、やっぱり志希が好きだと思っ

（でも…………あれは志希ちゃんが悪い！）

追試前の出来事を思い出し、美波はちよっぴりむっとした。

いくらなんでもデリカシーが無さ過ぎる。今回ばかりは自分から謝る気は更々なかった。だって、いつも志希ちゃんのペースに乱されてしまっている。

そもそも、彼女は何故自分を番にしたのだろう。最初は嫌がらせか遊びかと考えて内心ビクビクしていたけれど、どうやらそうではないらしい。あの色々と面倒臭がり屋の志希が、朝からずっと自分を探していたなんて意外でしかない。意地悪な言い方をすれば、今から雨や槍でも降るのではないかと信じられないくらいだ。

そうして考えの行き着く先で、ふと美波は片付けをしていた手がびたりと止まる。やはり自分から発せられるΩのフェロモンが志希をそうさせてしまっているのだろうか？　　…………だとしたら、志希の意思で番にした訳ではないということになる。このフェロモンとやらは、一体どこまで人の理性を崩してしまうのだろう。ちよっぴり悲しくなりながらも、美波はいそいそと机の上を片付けて帰宅の準備を進めた。

廊下の窓から外を見ると、辺りはすっかり暗くなってしまった様子だった。夏の終わりをそろそろ感じ、登下校時には薄い上着でも着た方がいいかもしれないと考える。下校時刻が近いからか生徒も少なく、昇降口へ向かうまでには誰ともすれ違うことはなかった。それがなんだか、今の自分には寂しく感じた。――時だった。

視界に意外な人物が映ったのである。頭にハテナが浮かぶ中、恐る恐る近付いてゆくと、美波が在籍しているクラスの下駄箱の前で、彼女はすやすやと眠っていた。

それにしても、風が入りやすい昇降口にカーディガンという薄着姿で無防備に寝ているなんて危なっかしい。昨日はあれだけ人のことを無防備だと責めたくせに。むうと美波は頬を膨らませながらも、今だ寝ている志希に向かって優しく声を掛けた。どうしてこんな場所で眠りに就けるのか不思議でならない。自分よりも彼女の方が猫みたいだ。ゆさゆさと肩を揺らすと、やつのことで志希はちいさく身動きをして、ゆっくりと重たそうに目蓋を開けた。

「はふう……。んっ、み、なみちや……?」

「もうっ！　志希ちゃんたら、こんな場所で寝ていたら風邪をひいやうよ?」

「んん……っ、まってた」

「待ってたって……。私を?　……なんで、」

「ついし……おわった?」

「え?　あ、うん、ばっちりだったよ」

「そっかあ」

寝惚けているのかな?　志希は美波に向かって、ふにやりと微笑み頭を優しく撫でてくる。……おかしな志希ちゃん。でも、どうして待っていたのだろう?

これは本当に今から槍が降るのではないかと、美波はちよっぴり笑いながら、まだ眠たそうにしている志希を抱き起こしてあげた。

興味はなくとも、その名前は耳に入る。

教師達からはよく名前を聞き、試験の成績発表の紙ではいつもあたしの隣に彼女の名前がある。おまけに、偶に顔を出してみた全校集会では生徒代表で壇上に登りスピーチをしていたし、廊下を歩けば張り出してある生徒広報とやらの彼女の名前が載っている。

もっともーっとと苦情を言ってもいいなら、昼寝をしようと思庭に向かえば、月に数回の頻度で異性同性問わずに告白をされている姿を目撃する。昼寝できないじゃん、これじゃあ。

まったく、もの好きだよねえ。あんな真面目ちゃんを絵に描いたような人間をさ。志希ちゃんには合いそうもないな、顔は可愛いけど。てゆうか美人？ ふわりと鼻をくすぐる甘い匂いは、彼女がつけている香水がナニかかにや。

ん？ ああ、話が脱線したね。……と、まあ接点がなくてもこれだけ見聞きをすれば、嫌でもあたしの記憶に少なからず残る訳。

……そういや、この前、香水を調合していたら彼女が来たな。下校時刻だから、とかなんとか。教師達のパシリにされるなんて同情するよ、志希ちゃんは一回もパシられたことがないけど。

その時の彼女もやっぱり良い匂いがしたな。ずっと嗅いでいたくなるような不思議な匂いだった。そうそう、こんな……

「……ちゃん。もうっ！ 志希ちゃんったら。こんな場所で寝ていたら風邪をひいちゃうよ？」

ゆっくりと目蓋を開けると、随分と懐かしい記憶の人と一致する人物が目の前にいた。その後と言えば、何故だか頻繁に自分を探しに来るようになり、のんびり過ごしていた志希にとってはやたらとペースを

崩されたものだった。

寝起きでぼんやりとした思考の中、ぐいっと身体を抱き起こされる。昨日の時に感じたことだが、よくこんな細い体でこれ程までの力があるものだ。素直に感心をする。スポーツかナニかをしているんだっけ？ きゅっと美波の指を握ると、志希の指の冷たさに吃驚としたのだろうか、一瞬だけ目を瞑った。美波の指は志希とは真逆で温かい。なにもかも、お互いに違うのだと言われているような気がした。

「っ、志希ちゃん、どうして待っていたの？」

「ん？」

……はて？ どうしてと問われれば、どうしてかにやあ？

なんとなくだけれど、あのまま帰ってしまったら駄目な気がした。二回も泣かせたくて泣かした訳ではないのだ。

だけど、無駄に誰かと馴れ合ったりするのは、志希にとって面倒だ。自分が異質だと思ふのなら、勝手に離れていけばいいと他人に対して思っていた。今もそれは変わらない気持ちだ。

でも、何故だか美波のことは放っておけなかった。昨日だって放っておけずに番にまでしてしまったのだ。今ではもう何ともないような表情をしている美波だが、自分が傷付けたのは事実だ。なら、謝らなければならぬ。きつと、今までも何回か傷付けたことはあるのだろっけ。

しかし、志希は誰かに対して謝るということを減多にしたことがなく。おかげで、いざ謝罪の言葉を述べようとすると上手く言葉が出てこない。自分自身に焦ったくなってしまう頭をわしやわしや掻く。その姿を美波は戸惑いながらもずっと見詰めていた。

「えっと、……さっきはごめん」

「もしかして、番を解消したいとか……？」

ほぼ同時に言葉が出ると、思わず美波の的外れな質問にぼかんとしてしまう。彼女も彼女で、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。いやはや、番にしてから一日で解消して……。彼女の中での一ノ瀬志希像は一体どのように描かれているのだろうか。随分と酷い人のような気がしてならない。

「あの、志希ちゃん……」

「だから、っ、ごめんって。あと……番を解消する気はないから」

「え、……………どうして？」

どうして、って。そんなの、あたしが訊きたい。

だけど、手離したくはない。あたしが美波ちゃんに対して、恋をしていると断言が出来ないけれど、それでも今、この手を絶対に。

握ったままの指を静かに絡めて「帰ろっか、美波ちゃん」と優しく志希は微笑んだ。

■
□¹ ■² □³ ■⁴

あの日から志希ちゃんは穏やかに微笑むようになった。

何がきっかけなのかと訊かれたら、いまいちよく分からない。きっと彼女なりに思うことがあったのかなって、そう深く考えないようにした。

志希ちゃんと私は真逆の人間で、いつも何を考えているのかが分からない。次に相手がこうするっていう行動も予測がつかなくて……多分、これからもずっとそんな感じだろうなって。志希ちゃんのことを理解したいと歩み寄るけれど、予測がつかないことは、それはそれで楽しい気もするからいいかって、最近は思うようになりました。案外、私も振り回されるのは苦じゃないみたい。

だけど、一つだけ頭を抱えていることがあって。

志希ちゃんに恋をしている私と、私をなんとも思っていない志希

ちゃんが番であること。

それは残酷な縛りのような気がして。本音を言えば、私は志希ちゃんが好きだから触れられたいし、触れたいと思います。でも、片方に気持ちが無いのに触れ合う行為は、とても悲しいことだと思うから、私は志希ちゃんとはまだ触れ合っていない。

でも、一体それがいつまで続くのでしょうか？

この関係が変わることってあるのかな？

教科書をパタンと閉じて机の上を整頓すると、美波は鞆の中から手帳を取り出した。あれから数えるとか三ヶ月が経とうとしている。つまりは美波の発情期が近いことを意味していた。抑制剤は毎日きちんと飲んでるし、志希の方には確認をしていないが特別辛そうにもしていないので問題はないと思いたい。

「はあ……っ、」

それにしても、意識をしている訳ではないけれど、気を抜くと自分から熱っぽい吐息が出てしまう。体も熱を帯びている感覚が分かる。じんわりと汗ばんだ手を鞆に入れていたウェットティッシュで拭いて誤魔化した。

何か冷たいものが欲しい。

そう考えて、真つ先に浮かんだのは志希の指だった。彼女の指は美波の体温と違って、いつも驚く程に冷たい。

「……………駄目駄目！ 違うからっ！」

自分の浅ましい煩惱を振り払うかのように素早く頭を振る。抑制剤を飲んでいても辛いものは辛いのだ。発情期の脅威と言えば、予定日が来る前日とは比べものにならない程に身体が火照って落ち着かないし、寝ている時はあまりの熱さに目が醒めることだってある。授業だって必死に集中をして、やつとの思いで頭に入れる。熱を冷めたいという

気持ちには、美波を時折自暴自棄にもさせた。冷ましてくれるなら、いつそ誰でも良いと、通りすがりやクラスメイトの人達に縋り付きたくなかった。

そうして、ギリギリの理性のまま、結局は自分の指で熱を冷まして、乱れたシャツの上で汚れた指を眺めると、なんとも滑稽な感覚に陥っていくのを一週間は繰り返す。一日でさえ随分と長く感じるのに、それを一週間も過ごさなければならぬなんて苦痛でしかなかった。

しかし、今の美波が考えている問題はいつもと違う。今回は学園でのごし方よりも、志希に対しての不安の方が大きかった。

だって、その、好きな人が目の前に居るから。……触ってほしいに決まっている。嗚呼、もうっ！ と頭を思い切り振って、美波はとある決断をした。

志希ちゃんと一週間は会わないようにしよう！

うん！ それなら、きつと大丈夫！ ……だよな？ と力拳を作る。会わなければ欲に塗れた自分自身を見なくて済む。そう考えたからだ。よしっと美波は意気込み、いつものように生徒会室へ向かった。

「美波ちゃんてば、遅くなーい？」

「し、志希ちゃん……!？」

「他に誰に見えんの、美波ちゃんは」

志希は雑誌を見ながらポッキーを食べていた。なに、この出鼻を挫かれた感覚は……!？」

美波はがくりと項垂れながら鞆を椅子へ下ろす。他の生徒会メンバーは特にやる業務も無いようで、連絡ボードを確認したら帰っていったそうだ。それで何故、メンバーでもない志希が此処に居るのか。メンバー達は志希に甘いような気がする。じとり彼女の方を見れば、ふにやんと微笑み掛けてきた。

「……………志希ちゃんって、狡い」

「は？ ナニが？ ああ、ポッキー？」

違います。それでも差し出されたポッキーは有り難く受け取るけど。志希は紙パックのミルクティーを飲みながら、ケラケラと楽しそうにこう告げた。

「そういう美波ちゃん、三日後でしょ？」

「ぶっ……………！ べほっ、っ、こほっ、…………え？」

「うわ、美波ちゃん汚い。急にどうしたの、興奮した？」

だから違います！ ていうか、何で志希ちゃんが私の予定日を把握しているの。てっきり忘れていたのかと思っていたのに、日付まで正確に当ててくるなんて。思いっきり咽てしまった美波は慌てながらハンカチで口を抑える。

美波が何を言いたいのか察知した志希は、(生徒会長の美波が座る)机の上の卓上カレンダーを指差して得意げに笑っていた。確かに、三日後には自分で付けた印がある。でも、何の日だか分からない程度の星マークしか印していなかったのに、流石は志希と言うべきか。鋭い。

「あたしも防止剤がないし、流石に今回はやばいかもね。にやはん♪」

「えっ……………!？」

「えっ、て。ある訳ないでしょ。考えてもみなよ、美波ちゃん。美波ちゃんが持つてる抑制剤だって馬鹿高い薬代なんだから、類似して作る防止剤の成分だって手に入れるのが大変なんだって」

えええ……………と更に項垂れた美波に、志希は最高に面白そうに笑っていた。何がそんなに面白いのか、不思議でならない。前回は防止剤を飲んでいたとは言え、志希の方だって一杯一杯で余裕が無かった筈なのに。薬が無いとなったら、確実に番である志希の理性は危なくなる筈だ。「なあんか勘違いしているみたいだけど、美波ちゃんって薬を飲んでいても割とフェロモンはずうっと出てるよ？ 今はあたしにだけなんだろうけど」

「そうなの……?」

「うん。あまつたるーい匂いがいつもするもん。流石に発情期が近い日は微量にだけどね。でも、今は結構してるかな? 予定日が近づくにつれて濃くなる感じ? ハスハスー♪ ううん、志希ちゃんってば美波ちゃんの誘惑にいつも耐えててタイヘーン♪」

そう言われても、甘い匂いは美波自身では分らないのだ。試しに、すんとかくる自分の制服を嗅いでみても、当たり前だが無臭のような気がした。否、無臭であってほしい。

そういえば、番を見付けたΩはその相手のαにしかフェロモンを発しない、だったかな? と思いつくやうに尚更、志希が何故こうも平然としていられるのが疑問だ。割と好きでもない人に、体を許したり触れたりするのは抵抗が無いのだろうか。思い返すと軽々しく(頬にだが)キスをされたことが何回もあるし、前の発情期の時だったような気がする。分らないけれど『あたしが抱くから』と言っていた。

ううんと首を捻れば、志希は少々面白くなさそうな顔で美波を見詰めている。

「……な、なに? 志希ちゃん」

「べつにー? なんか失礼なコト考えてなかった? いま」

「失礼というか……志希ちゃんって、割とこういうことにはあつさりしているなあつて。好きでもない人に軽々しく触れるっていうか、スキンシップは多いじゃない」

「でも美波ちゃんにしかしてないけど」

むすつとした表情で即座に返答をされると言葉に詰まってしまう。彼女の言う通り、誰かに触れる場面はおろか、志希が他の誰かと話している時にさえ遭遇したことがない。確かに、されているのは美波にだけのようなのだ。

「えつと……、ごめんなさい?」

「……ま、いいけど。美波ちゃんの中の志希ちゃん像は一体どうなつて

いるのかにやー」

ふいつと目を逸らされた。面白くなさそうな顔で志希は雑誌をパタンと閉じると、鞆を持って無言で生徒会室を立ち去ってゆく。美波が慌てて何か声を掛けようとする暇もなく、みるみる内に志希の姿は遠ざかっていった。どうやら怒らせてしまったみたいだ。

いつぞや、デリカシーが無いと彼女に怒ったのは美波なのに、何をやっていいのかと自分を責める。でも、あの時は自分が志希が好きだったからこそ怒ったのであつて、志希は自分を好きではない筈だ。

正直に言えば、志希が怒ったことが意外だった。美波の発言になぞ、いつも気にも留めない様子なのに。最近の志希ちゃんは、やっぱりよく分からない。それでも流石に、言われたら良い気はしないのだろうか。

三日後には、発情期がくる。

その期間は極力、志希とは顔を合わせないつもりだった。

良いタイミングではないけれど、これをきっかけに少しだけ距離を置こうと考える。彼女へ謝るのは発情期が終わってからの方が自分にも、防止剤がない志希にとっても良いだろう。

それに発情期も然り、美波は色々怖かったのだ。いつも怒らない志希が、ああして不機嫌になったことなど今まで無かったから。うじうじ逃げるのは美波らしくないと思いつつも勇気が出ずにいた。志希に嫌われても仕方がないと、いつもは割り切って追い掛け回していたのに。それなのに、番となった次の日からここ最近までの志希は、美波に優しく話し掛けたり微笑むことが多かったから、嫌われることがすつかり怖くなつてしまった。彼女の笑顔が見られなくなることが怖い。

もし、番を解消すると言われたら暫くは立ち直れなくなってしまうだろう。気分屋の志希のことだ。どれが引き金になって、解消すること

になるかなど全く見当が付かない。喧嘩という喧嘩ではないのだろうけれど、初めての志希の怒りに美波はいま戸惑っていた。

7 /

ビーカーに淹れた珈琲をゆっくりと啜り、ぼうつと天井を見詰めていた。自宅には沢山の実験器具があり、他にも面白い化学の本や難しい本など幅広い層の本の山が積まれている。ひと息ついてから志希は部屋にある透明のボードを何気なく見ると、いつぞや美波の為に調合しようとした香水の分量がメモとして殴り書きしてあった。懐かしい。

志希の部屋は自分が好きだと思うもののしか置かない主義だ。香水などは山のようにあるが、どれも自分にとっては必要なものだと言えるので無駄ではない。なにせ、志希の趣味はアヤシイ実験と香水作りだ。自分が少しでも興味がないものを置く意味がないし、邪魔だとも考えている。

自宅は所謂、志希にとって大切な宝物庫。

一人暮らしをしており、縛られることもない。気分です帰らないことも多少あるけれど、この家にある全ての物は志希にとって大切なものたちだ。そんな場所に、誰かの為のメモ書きがあるなんて。志希は自嘲気味に笑った。

ボードの文字を全て消す。Ωと分かった今では香水は不要だろう。あの強烈なフェロモンは香水で掻き消すことが出来ない。気休めにもならない。

「はーあ！ メンドくさいなー。ホンット……らしくない」

カーデイガンのポケットから小瓶を取り出し、志希は布団に寝転がった。錠剤が幾つか入っているこの瓶は、以前に美波へ説明した『対Ω用のフェロモン防止剤』である。

美波に『もう無い』と言ったのは嘘だった。

実は毎日、欠かさずに飲んでる。美波のフェロモンが普段は微量だとしても、志希の脳天をガツンと撃ち砕くような強烈な衝撃がある為だ。本人には決して言わないが、割と美波に触れたくなることが多々あった。

そもそも、発情期というのは少なからず人間の誰しもあるだろう。志希にだって勿論ある。Ω性の人間よりも強い発情ではないけれど、毎日のように身近に餌(Ω)を置かれて、ずうっと待てをさせられている状況は生易しいことではない。ゆさゆさと理性を揺さぶられる存在が身近にいるのだ。志希だって、そろそろ限界だった。

一段と深い溜め息を吐いた。小瓶を床へ適当に転がし、部屋の灯りを真つ暗にする。どうにも調子が狂ってしまふ。

嘘を吐いたのは、防止剤が無いとなれば美波を抱いても良い理由になると思ったからだ。好きかどうかなんて関係無しに、魂の共鳴とやらに理性が負けたと理由付けをすれば、触れることが出来ると考えた。

「……好き、ねえ」

本当に彼女を抱きたいのなら、お互いに両想いだと伝えれば良いだけだ。彼女が酷く気にしていた部分だった。……無理もない。前までは彼女を実際に疎ましく感じていたし、美波自身も志希の心境を察していただろう。

その状況から一変。『キミのことは好きではないけど、フェロモンに屈したから抱かせて』などと遠回しに言われたら、いくらなんでも片想いをしている側の美波にとっては辛い気持ちだろう。

……あたしも大概、天邪鬼というか。単に美波ちゃんに對してだけ、気持ち伝えることが難しいというか。

美波ちゃんが傍に居ないと落ち着かなくなるくらいには、あたしはどうかやら距離を詰められてしまったようだ。ガミガミと叱る口調も、少しでも温かい指も、生真面目でからかい甲斐のある性格も、知らない内にあたしは氣に入ってしまったて、手を

伸ばしてみたくなってしまった。触れなくなってしまった。

もう自分でも分かりきっている。フェロモンというのは単なる言い訳で、今はもうこんなにも新田美波という女の子に惹かれている。

そして、もしこの感情が恋だと言うのなら——なんとも滑稽な感情だ、志希は真つ暗な天井を見詰めてぼんやりと思った。相手の幸せを思い遣れるような優しい気持ちではない。触れて、壊して、閉じ込めた。なんとも暴力的な感情だ。

まあいいや。今夜はもう眠ってしまおう。

この件に関して、あたしはどうやら不得意みたいだから。



ゆったり目蓋を開けた時、美波の視界に映った目覚まし時計の指針は、学園に遅刻をしようギリギリの時刻を指していた。ゾワリとした悪寒が走るも一瞬のこと、慌てて重い身体を起こして、朝食も食べずに家を出る。

いけない！ 早くしなきゃ！

しかし、何かを忘れている気がする。予定日が近いと中々眠気も抜けず、ぼうつとしてしまうことが多いのだ。

まだ頭が覚醒しない中、ちらりと覗いた腕時計は始業開始を報せる鐘があと十分もしないで鳴るところだった。実は、美波は勉強だけではなく運動全般も得意であり、勿論走ることに自信がある方だ。全速力をすれば、何とか間に合う。残り時間と格闘しながら、全速力で学園へ向かった。

「はっ……、はっ、はあっ、ま、間に合った……！」

昇降口まで辿り着くと、始業開始までは残り僅か。へとへとになりな

からも靴箱の蓋を開ける。すると、見慣れない便箋が美波の靴の上に置いてあり、思わず首を傾げる。綺麗でシンプルな形の便箋は、裏を返すと見知らぬ名前が書かれていた。

「……なんだろう？ お手紙？」

ファンレターか何かだろうか？ 生徒会長である美波は、こうしてお手紙を受け取ることが少なくない。月に何回かは異性同性を問わずに、お手紙を受け取っていた。内容はいずれも、生徒会長に憧れを持つ者が書いたファンレターや、有り難いことに美波の容姿に見惚れて書かれたラブレターなどが常だった。しかし、今は――

「つ……、いけない！ 早く教室に向かわない、と……」

すつと背後から伸びてきた手は美波の靴箱をぞんざいに閉めた。不機嫌そうに鳴るその音に、ドクリと心臓が飛び跳ねる。遅刻をしてしまうと焦っていた美波は、背後から近付く音に気付かなかった。気配すらも察知出来ずにいた。

「……志希ちゃん？」

「おはよう、美波ちゃん。随分と遅いね？ 寝坊でもした？」

ぐつと腕を捕らえられた美波は訳が分からないまま、志希の思うように連れて行かれてしまう。掴まれた腕からゾクリと熱を帯び、美波は思わず俯いた。それに、走っただけなのにやたらと体が重たい。戸惑い一つも引つ張られていると始業開始の鐘が鳴ってしまった。一体どうしたというのだろうか。

志希ちゃん、そう何度呼び掛けても彼女はすつと無言のままで、すれ違ひざまに教師からその姿が見付かり、声を掛けられた時も無言で通り過ぎていった。志希は足を止めず腕を引つ張ったまま、美波を生徒会室まで連れてきたのである。

「あ、の……志希ちゃん？」

昨日のことをまだ怒っているのだろうか。志希の放つ鬱囲気はただ成らぬ気配を纏わり付かせていた。

それにしても、少し様子がおかしいような。額からは汗が薄っすらと浮かび、呼吸も若干だが荒い気がする。心配をして額に触れようとすると、志希は美波の手を素早く振り払った。

「つ……！！」

「あー……、ごめん。ところで美波ちゃん、……今日はクスリ飲んだ？」

「え？」

言われてみれば、今朝はドタバタしていて美波はまだ薬を飲んでいなかった。はつとして首を振ると志希は眉間に皺を寄せたまま、ペットボトルの水を美波に渡す。早く飲めということだろうか。

「……美波ちゃんのフェロ、つ、……ちよつと今のあたしにはしんどい」そう言った志希は疲れ果てた様子で椅子に座った。

美波は申し訳なく思いつつも、やはり思う。

一体いつまで、この関係は続くのだろうか？

それは昨日も考えていたこと。

好きでもないのに番でいるなど、お互いの為にならない。発情期がくる度にこうして薬を飲んで、誤魔化して。自分がいつそ割り切って、志希に抱かれることを受け入れれば済む話なのかもしれないけれど、志希だって好きでもない人に触れることを好みはしない筈だ。でなければ、彼女が昨日の美波の発言に対して怒る理由がない。仮に、志希が自分を好きならば、とつくに抱かれていると思うのだ。

この三ヶ月の間で志希が美波に触れようとしてきたことは、只の一度もない。

「志希ちゃん、昨日はごめんね」

「……別に、いいよ。もう気にしてない。それより、」

はつと志希が一層苦しく顔を歪めると、床に汗が滴り落ちた。酷く辛そうだ。近寄ってハンカチで汗を拭き取ってあげると、志希は美波の腕

を制止した。

そんなことをするよりも薬を飲め、無言でそう命令をされている気分だった。彼女を苦しめたい訳ではなかったので、美波は素早く薬を体内に飲み流した。

辛かった。やり場のない恋心と浅ましい色欲は美波を常に困らせる。

志希の傍に居られる喜びもあるけれど、そこに彼女の気持ちがないと恋愛というものは成り立たない。美波は選択肢を考えていた。

このまま番で居続けることと、番を解消して悩みから解放されることは、どちらが辛いことなのだろう。番を失ったΩはもう二度と番を作ることが不可能だと聞く。

「番……やっぱり解消しない？ 志希ちゃん」

とうとう言ってしまった言葉に志希は目を見開く。そして、いよいよ本格的に表情を歪ませた。冷たく光る蒼い瞳が美波を刺すように、視線が痛く突き刺さった。

「……なんで？ ……ああ、そのラブレターの相手？」

「ちが……っ！」

「じゃあ、なんなの？」

「だって……その方が楽でしょう？ 私も……志希ちゃんも」

「あたしも？」

「私は……志希ちゃんのことを好きだから。でも、志希ちゃんは私のことが好きではないでしょう……好きでもない人を軽率に番にしちゃ駄目だよ、志希ちゃん」

なるべく冷静に、ゆつくりと美波は言葉を紡いだ。

必死に発した言葉の数々は情けない程に震えている。

「……する気は、ないから」

「え……？」

「番を解消する気は、今後一切ないから」

「……………な、んで？」

「なんでも」

「……………遊びなら、もう止めようよ。志希ちゃん」

「やめない」

美波の発言に志希は反対の言葉しか言わなかった。

どうしてそこまで固執するのか。抱きもしない番などα側にとつても意味がない存在だろう。何故ここまで志希が自分を手離さないのか、理解が出来なかった。すると、志希は何かを諦めたように溜め息を吐く。そうして、ふっと自嘲気味に微笑んで美波の頬に優しく触れた。

「……キスしていい？ 美波ちゃん」

「志希ちゃん…………？」

「好きじゃないとしちゃ駄目なんですよ？ ……じゃあ、もういいじやん」

「え…………？」

思考が追いつかない美波に、志希は困ったように笑って。

そのまま、志希は美波の唇に優しく自分の唇を重ねた。

「あたしも美波ちゃんが好きなんだって」

フツの女子高生ってどういうものなんだろう。

あたしが『フツの女の子です』って言ったとしても、きつと周り是否定をすると思う。そもそも、フツがなんなのか分からない。

だから、これはあたしの憶測でしかないけれど、退屈そうに見えているフツの世界でも、案外そっちの方が幸せなのかもしれないね。

ゆっくり唇を離す。美波は信じられないと言っても言いたげな表情をしていた。その表情が面白くて、志希は再び唇を重ねる。最初は触れるだけの口づけを何回もして、美波の反応を確かめた。

「ん……っ、し、志希ちゃん」

「ナニ？」

「な、何って私が訊きた……っ、！」

正直、戸惑う彼女の反応が面白い気持ち半分、今は自分の顔を見られなくなかった。告白するのは初めてだったから、志希だって照れたりもする。エリートや天才だと称されていても、根っこの部分は自分も年頃の女の子なのだ。美波と居ると良くも悪くも、初めての体験ばかりをしている。

美波が志希の発言を信じられないのは無理もない。

だけども少し考えてもらえれば、面倒臭がり屋の志希が毎日薬を飲んでいたのは何も自分の為だけではない。彼女の為でもあったのだ。

美波の発情を初めて目の当たりにした日、泣きながら志希に『好きじゃないなら抱かないで』と懇願してきたことをずっと覚えていた。その約束を志希は一応守っていたのだ。この三ヶ月の間は、なにも興味がなくて美波に触れなかった訳ではない。単に、また泣かせたくなかったのだ。結局、次の日には自分のデリカシーの無さが原因で、また泣かせてしまったが。

「はあ……っ。し、しきちゃ……」

「約束。……ちゃんと抱かせて、美波ちゃん」

耳許でそう囁く。もう負けだ、今のあたしは美波ちゃんが欲しい。ぐつと志希の肩を押し返す美波の手を取り、そのままきゅつと指を絡める。びくり、彼女の肩が震えた。徐々に体重を掛けて押しいくと、あまり抵抗という抵抗をしてはこなかった。

あつという間に机の上に美波を組み敷く。くらくらと揺さぶられる理性は限界を迎え、志希の下半身にある性器は硬くそそり勃っていた。優しくなど、どう足掻いても出来る筈がない。

それでも、なるべくは――

「……痛かったら、すぐに言って」

傷付けたくはない。

彼女を壊してやりたくなる程に本能は暴力的だけれど、悲しませたい訳ではないから。なるべく丁寧に美波の制服に手を掛けて、ゆつくりとボタンを外していった。焦ったく、引き千切りたくなる気分だ。

「志希ちゃん……辛いのか？」

「……別に、気にしないでいいから」

耳に響く、はっはつと浅い自身の呼吸音が煩い。

辛いのも何も、志希は自身の性器を好ましく思っていない。偶の時に溜まりに溜まって処理をすれば疲れるだけだったし、これなら本当にフツの女の子が良かったのかもしれないと心の中で悪態を吐いた。己の手で抜いたとしても、特別気持ち良くもない。

それなのに、美波の肌にやんわりと触れると、柔らかくて、すべすべで気持ち良くて、堪らなくなる。なるべく優しくしたい心持ちは、あつという間に崩れ去りそうになっていた。



この前から、珍しいものばかりを見ている。上に乗っている志希を見て、そう思った。

番になる前と、なった後と、美波と志希の関係性は変わったけれど、どうして志希が自分を好きになったのかはよく分からない。

美波に微笑むことは増えたが、基本的に授業をサボることは変わらないし、意地悪をされたり、からかわれることは常であった。強いて言えば、最近だと生徒会室に居座るようになったからか、メンバーと接するようになったことくらいだ。

いつの間に、志希ちゃんは私を好きになったのかな。

思うがまま、志希に制服のボタンを外されるまで、美波はまるで今の出来事が他人事のように感じていた。ひたりと指をお腹に這われ、あまりの冷たさに目をぎゅゅと瞑る。そのまま、指が上につつと動くと、優しい手つきで胸の突起を摘まれた。

「んっ、……あ、し、きちゃん、ねえ」

触れられる部分がじんじん熱を帯びていき、身体の火照りが増す。呼び掛けても志希は黙ったままだった。もの凄く険しい表情をしている。呼吸も荒さが増しているし、汗の量も増えていた。酷く辛そうだった。

今日は会った時から様子がおかしい。

「し、きちゃん……！　ごめん……っ、」

彼女の体をぐぐつと押し返し、くるりとお互いの体を反転させると志希は恨めしそうに美波を睨んだ。大人しくしていろ、とでも言いたげだ。

だが生憎、力でなら本気を出せば美波の方が上だ。現に、志希が美波の肩を押し返してもビクとも動じなかった。少々手荒になってしまいが、今は自分のことよりも彼女が心配だったのだ。だから、美波は後に引けず、そのまま志希を押さえ付けた。掴んだ手首から早い脈動を感じ

る。

「はっ……、なんの真似？」

「……………辛そうだから。私よりも、志希ちゃんが楽になった方がいいかなって」

「……別に、Ωの発情期ほどじゃないから。誰だってコーフンするとはあるでしょ。βの人間だってそうだし。あたしは単純に、様々な身体的能力は高いけど体力だけが馬鹿みたいに低いから。一回コーフンするとしんどいってだけ」

それは、以前気を失った話だろうか。両性具がある人間のソレを初めて目の当たりにしたが、どのような感覚なのか全く想像がつかない。普通の女性とは勿論違うのだろうけれど、きつとそれだけではない筈だと美波は思う。志希の指はいつも冷たいし、体も華奢だ。

「……ちゃんと、ご飯食べてる？」

「半裸状態でこんな会話する？　フツ」

馬鹿なの？　とばかりに志希は美波を見る。

しかし、美波は美波なりに本気で志希のことを心配していた。

「でも、今されて……志希ちゃんが気を失ったら困るけど」

「一回だけじゃ満足できないの？　美波ちゃんは」

「っ……、そうじゃなくて！」

かあつと頬が熱くなり反論すると、志希は困ったようにクスリと笑った。はあつと溜め息を吐けば、一限目は既に半分を過ぎてしまっていたので、暫く気持ちが落ち着いてから教室に戻ろうと考える。葉があれば、ある程度は堪えられる。それに、今は身体の火照りよりも満たされた気持ちで頭が一杯だった。問題は……

「志希ちゃん……大丈夫？」

「大丈夫に見える訳？　美波ちゃんは」

「見えない、けど……」

ちらり、そそり勃つ性器をまじまじと眺めてしまう。すると、志希に

肩を叩かれた。退いて、と小さく抗議される。訊けば、滅多に興奮することは無いらしいが、その分何故か一度勃ってしまおうと中々治らず、仕方なしに自分の手で慰めるしかないらしい。恐る恐るその性器の先端に触れた瞬間、志希は微かに吐息を漏らした。

「あ……っ、ちよつと！ なにしてんの……っ、退けて」

「だって……。鎮めるのには慰めないといけないんでしょ？」

指で先端を弄ってみると志希は一層高く声をあげた。反応が可愛らしい。そう思える程には、少しばかりの余裕が美波に戻っていた。

そのまま志希の性器を手のひらで包み、ゆつたりと上下に擦ると硬さがどんどん増してゆく。ぬるりとした液体が手に付着した。

それが彼女の性器から出たのだと思うと、初めて実物を見る美波にとってはなんとも不思議なものに思えてくる。ぬちゃり、ぬちゃり、手を動かす度に音が出る。志希は恥ずかしいのか、美波の肩を力の限り叩いて抗議してきた。

「はっ……、あ、な、にして、んの……んんっ！」

「……楽にしてあげようかなって思ったんだけど」

「余計なこと、……し、ないでっ、っ、……あ」

掠れた声で怒られても、美波はちつとも怖くなかった。余計なことをと言われても、自分だって好きな人には触れたいと思うのだ。

それに、こんなに苦しうにしているのに、一体どうするつもりだったのだろう。自分が授業に戻った後、一人で慰める志希を想像したら、モヤモヤした気分になってしまう。志希はぎゅっと目を瞑り、ひたすら快感に堪えている様子だった。

「志希ちゃん……」

「は……っ？ いい加減に……っ、！ んう、……ああっ！」

一人で慰めるならば、自分がしてあげたい。

美波は髪を耳にかけ、性器の先端からゆつくりと口を含む。

このことに関して、美波は無知に近かった。自慰行為はしたことがあ

るけれど、誰かと愛し合った経験はなかったし、男性器の自慰行為のやり方など尚のこと知らない。

だから、本で読んだ通りに真似をしてみた。本と言っても漫画本だが、近頃の少女漫画はちよつぱり過激なシーンも多くて、恥ずかしくなってしまうものが多い。

「あ、っ、やだっ、て、はなっして、み……っうっ！ は……っ」

ちゅつと先端に吸い付いて、舌で強めに擦り舐めてみる。ゆつくりと手で裏筋に触れれば、志希の体がびくりと震えた。どうやら気持ちがいまいたんだ。彼女の嬌声がより高くなる。

「んう……っ、ちゅ、っ、んっ、はあ……っ、」

「は、はなれて、っ……ばっ！ ……っ！」

ぐつと志希が全力で美波の体を突き放すと同時に、先端からとぷりと白濁の液体が吐き出される。必死で呼吸を整えながら、志希はげんなりとした様子で美波の汚れた指を見詰めていた。

漫画の真似なんて不安はあったけれど、どうやら射精をしてくれたみたいなので少しだけホッとする。……志希ちゃんの視線が痛いけど。

「あの、しき……っ!？」

美波は気まずそうに近付き、ハンカチで志希の汗を拭く。すると、不意に腕を引き寄せられ、バランスを崩してしまった。再び志希の上に乗ってしまった美波は、大人しく彼女の心臓の音を聴いていた。無我夢中になりながら攻めてしまったけれど、いざ事を終えると気恥ずかしくなる。はつと志希が浅く笑った。美波の頭をさりと撫でてくる手つきは随分と優しい。

信じてみてもいいのかな？

少しくらいは自惚れてもいいの？

ねえ、志希ちゃん。

「く、くすぐりたい……志希ちゃん」

「我慢しなよ、これくらい。はーあ……、美波ちゃんのクセに生意気。美波ちゃんの痴女。美波ちゃんの準強姦魔」

「う……っ。さり気なく酷い言葉を並べないで、謝るから……。でも、志希ちゃんだって私に触れたことがあるじゃない。おあいこよ」

「志希ちゃんはいんだよ」

「ええ………」

理屈がおかしいと顔を上げれば、志希は穏やかに微笑んでいた。それは当初の志希には無かった表情だった。本当に、色々と狡い子だと美波は思う。

「ふああ……あふ。ネムいなあ。このまま今日はサボっちゃおっかー」

「……せめて服を整えようね？ 志希ちゃん」

「にやふ……」。美波ちゃんに任せたく……」

「ええ……っ！ ああ、もうっ！ 志希ちゃんてばっ！」

ぎゅっとしがみ付いてくる志希に、美波はくすりと笑って。今度は美波から志希の唇へ、愛おしそうに口づけをした。

± S M

— 後日談 —

ふわふわ香る、甘ったるい匂い。

志希はふうと小さく溜め息を吐き、ぱたんと本を閉じた。集中できないつつの。そう隣の彼女に訴えるかの様に閉じた瞬間、分厚い本から埃が舞い、眉間へ皺を寄せる。彼女は志希の行動に、全く目を向けていない様子だった。

「あのさ、」

それどころか、カリカリとペンを走らせながら時折用紙に印を押して睨めっこをしている。表情は真剣そのものだ。華麗に次から次へと雑務をこなしていく彼女は、志希の声には気付いていない様子で次の用紙を手に取りうとしていた。残りはおと十五分程で完了、と言ったところだろうか。それにしても、しんどい。正直に言って、しんどい。

「はあ……」

志希は今度こそ、わざとらしく大きな溜め息を吐いて席を立った。

どうして彼女は、わざわざ生徒会室ではなく化学実験室で雑務をこなしているのだろうか、理解が出来ない。それに、珍しく仮病を使つてまで本日の授業は全て欠席をしていたのに。何がしたいのだろうか。

大体、幾ら律儀にフェロモン防止剤を飲んでいるとは言え、目の前の彼女から放たれるフェロモンは十分強烈であり気が抜けない。それも嫌いじゃない、好きな匂いだからこそ厄介だ。

志希はふると一回だけ首を振り、サイフォンで珈琲を淹れようと準備を始めた。途端、あ、と小さく声をあげた彼女は、ようやく志希の方を振り向いて「私も飲みたいな、志希ちゃん」と。一言だけ、優しく呟いてから用紙に目を戻した。

志希はげんなりとした顔付きで、彼女の方を見遣る。

今日の美波ちゃんは、どうにも不可解だ。ナニがって訊かれたら、うん。上手く言えないんだけどさ、なんだろうね。この違和感。あた

しの声もわざと無視してる感じ？ ううん、なんだろう。

渋谷とサイフォンの準備をして、ずとんと椅子に座り直す。強烈と言えば、あの日から二日が経っている今日は美波ちゃんの予定日であり、フェロモンが凄いのも当たり前だと言える。仕方なしに、気を紛らわそうと元素記号の歌を口ずさんでみるけれど、どうにもこうにも気が散って苛々してしまつた。感じたくはないが、じわじわと這い上がってくる理性の決壊には抗えそうにない。席を外そっかやあ。一旦外の空気を吸えば、まだマシになるかもしれないし。ていうか、クスリを飲んでいる筈なのに手が震えてしまうのは……あーあ、やばいなあコレ。

「あのさ、なんでわざわざ予定日なのに、あたしの近くに来るの？」

ぼつり、率直に思つた疑問符を彼女へ問い掛ける。

予定日と言っても、美波は既に志希と番になつていたので、他の者たちにはフェロモンが出ていない筈だ。危険な目には合わないだろう。寧ろ、番相手の志希と居た方が抱いて下さいとでも言っているようなものだ。

これが先程から、不可解だと考えていた内容の一つ。

だけど、志希の問いに美波は何も言わなかつた。用紙をじつと見詰めたまま固まつている。どうしたものか。わしやりと頭を掻き、志希はさつきまで読んでいた文献を思い出す。

もう一つの不可解な内容、それは……

「そもそも番になつた筈なのに、どうして美波ちゃんのフェロモンはこも増す一方なのかにやー？」

ダウト。美波はぴくりと指を反応させて、カランとペンを落としてしまつた。

文献では確か『番相手を見つければ、Ωの人間はその相手にしかフエロモンを発しない』と記されていた。

それは、志希にだって目に見えずとも分かる。これだけ強烈な甘ったるい匂いを放っているのに、周りの人間は全く動じていないからだ。おかげで志希だけが、毎日大変な訳だけだ。

そして、追記では『番を見つけたΩはその相手にだけフエロモンを放つが、愛し合う内に次第に治っていく』とも書いてあった。志希は美波に問い掛ける間に、自ら解を出してしまった。

要は、美波ちゃんのこの強烈なフエロモンの原因はこのあたし、志希ちゃんにあるって訳だね。まだ抱いていないもんねえ。ふんふん、にはは♪　なんだかスッキリしたなあ。ご機嫌にピーカーへ珈琲を注ぐ。芳ばしくて良い香りが鼻孔をくすぐった。それでも、いまだ固まったままの美波には到底叶わない香りだけれど。

「はい、美波ちゃ……」

机に珈琲を置いた時、からかいザマに美波の顔を見てやろうと覗き込む。それはもう真つ赤な顔をしながら、志希の顔をちらりと見返してきた。ん、その顔は流石に。潤んだ瞳で上目遣いは、流石に。

「い、意地悪しないでよ。志希ちゃん……」

流石に反則でしょ、美波ちゃん。



自分のフエロモンがどのくらい、志希ちゃんや周りの人達に強烈なのかを検討もつかなくて、困った表情で訊いた時には『美波ちゃんは、あたしのが欲しくて欲しくて堪らない時ってある？』って、そう訊き返してきた。質問の内容が恥ずかしくて、答え辛くて、戸惑っていた私に志希ちゃんは面白そうに微笑んで、すんなりと言った。

『きつと、美波ちゃんが感じてるのと同じくらいに、厄介なモンだよ』
って。でもね、志希ちゃん。きつと同じくらいではないと思うの。だつてね……

「は……？　あの、美波ちゃん、」

いっだって触れて欲しいし、触れたいなって欲していて。志希ちゃんの冷たい指で、ソプラノ声で、私の全てを愛して欲しいって、ずっと願っていた。

「もしかしでさ、」

本当は今日、まだ薬も飲んでいないの。そう言ったら、志希ちゃんは怒る？　あれだけ飲んでって言っていたのにね。

触ってほしいのに、私から誘う勇気が無くて、薬を飲まなければ志希ちゃんの理性が崩れるんじゃないかなって馬鹿な事を考えていたんだよ。

「あたしのこと……誘ってる？」

誘ってる。今の私は、志希ちゃんの全てが欲しい。なのに……
すつと伸びてきた綺麗な手に驚いた美波は、勢い良く身を引いてしまった。ぐらりと揺れた時には既に遅く、ガッタンと盛大な音を立てて椅子から転げ落ちてしまう。

なんて、なんて浅ましい事を考えてしまったのだろう。あんなに自分がΩ属性だという事実には、気持ち悪さを覚えていたというのに。

この前からずつと、触れて欲しいとそればかりを考えてしまう。
いけないと葛藤する自分に対し、志希は力の限り美波の腕を引き上げて抱き起こした。ふわりと漂う志希特有の香りに、無意識で鼻をすんと鳴らしてしまう。

「にはは♪　なんだか似てきたねえ、美波ちゃん。そんなに志希ちゃん
の匂いが良いのかにやー？」

「あ……、え、えつと、ごめんね」

「別に。離れてなんて言ってる」

ぐっと微かに肩を押し返すと、志希は力の限り美波を抱き寄せた。無言で離れるな、そう命令をされているようだ。きつと抵抗なぞ、美波の力を以てすれば志希のことを簡単に押し返して離れられる筈なのに、それが出来なかった。なにせ、今日はずっと志希を欲していたからだ。

だけれど、美波は悩んでいた。α性の志希の知能や身体的な能力は抜群に良い(特に嗅覚)。だが、体力だけは平均の一般女性よりも遥かに下回っている。その証拠に、この前の事後は暫く起き上がるのが困難だったし、気絶をしてしまったことだってあった。

それを含めて考えてみると、美波の願望は志希への身体的負担が大き過ぎる。下手をしたら、また再び気を失ってしまう可能性がゼロではない。美波にとつて、そこまで大切な人へ負担を掛けてまで愛し合いたいとは到底思えなかった。

それなのに、自分の色欲はどうしたつて体を熱く疼かせる。きゅつと背中に回された志希の指が、カリッとブレザーの上から爪を立てられて、微かに吐息が漏れてしまった。

「あ、……し、きちゃん、駄目」

「駄目ってナニが？ 別に、なあんもしてないけど」

「っ、め……っ、」

「にやはは♪ 誘ってきたのは美波ちゃんなのにー？」

凶星を突かれ、ぐっと唇を噛み締めた。ぐぐぐと爪で背中を刺激され、小さく仰け反ってしまう。葛藤をし続ける理性と性欲は、正直に言えば性欲の方が勝っている。

そもそも、授業を全て欠席したのは薬を飲まずにいた所為で集中が出来ないと思っただけ、朝から尋常ではない疼きがもうそこまで近付いていた。志希の方をずうっと見なかったのは、見てしまったら抱いて欲しくなるからだ。

だったら、最初から薬を飲めば良かったのに、美波の頭の中では矛盾

した考えが一向に合致してはくれない、抱いて欲しい、負担を掛けたくない、何故自分がΩ性なのだろうと常にぐるぐる巡っていた。

「素直じゃないね、美波ちゃん」

「……志希ちゃんに言われたくない、かな」

「そ？ でも、美波ちゃんが望むならあたしはソレを与えるけどね」

「っ、」

ふっと耳に掠めた志希の生温かい吐息が、美波の理性をとうとう壊す。嗚呼、もう面倒臭い人間だなあ私、って苦笑いをしながら。

端ないかな、こんなこと。でも、今はもう、なにも考えたくないの。

「み、」

「ねえ、志希ちゃん」

――美波のこと、抱いてくれる？

まだ淹れたての温かい珈琲をシンクに捨てて、サイフォンを片付ける。彼女が広げていた小難しい書類やら何やらを全て適当にまとめて、終始無言のままの彼女の手を引き、化学実験室を後にした。

どうにも美波ちゃんは心臓に悪い。からかい過ぎるとあたし自身もダメージを受ける、諸刃の剣のようだ。否、今回は冗談と本気が半分ずつだったけれど、それでも、まさか真面目な生徒会長サマがあんなコトを言うなんて、正直に言えば吃驚してしまったのが事実だった。

「あの、志希ちゃん」

ふと、背後から不安そうな声が聞こえる。繋いだ彼女の指先は、いつだって自分の体温とは真逆で温かくて、そして、小さく震えていた。大胆なんだか泣き虫なんだか、強気なのか弱気なのか。よくもこう、あたしを振り回してくれる存在だ。

「……ナニ？」

「……ごめんね。本当は、菓を飲んでいないの」

振り向くと、罰が悪そうに美波は顔を俯かせた。ナルホド、通りで甘ったるい匂いが強い筈だ。いくら自分が防止剤を飲んでいても、流石にΩのフェロモンには抗えない。志希はちっと舌打ちをした。その音に、美波はびくりと体を震わせる。

だが、志希が舌打ちをした理由は自分自身に対してだった。

「別にいいよ。……そんなコト」

「え？」

どうにも、志希は美波の気持ちいが分からない節がある。別に鈍感だと言っただけでもないだろうし、人並みにはコミュニケーション能力もあるのに、こと美波に関してだけ志希は『鈍感』という言葉が当て嵌まる。二度も泣かせた出来事を歩きながら思い出していた。

「クスリ、なんで飲まなかったの？」

「えっと……」

「そんなに志希ちゃんに抱かれたかったとかー？」

にやはは、なんて。ああ、またこんなコトを言ったら泣いちゃうかにやあ？ デリカシーが無いとか言われちゃったりして。

はふっと浅く息を吐いて、全く進歩をしていない自分へ自嘲気味に笑った。何故か思ったようにコミュニケーションが取れない。意地悪をしたくなってしまうのも、美波に対してだけだ。ちらりと後ろを歩く美波を見ると、顔を真っ赤にさせながら微かにこくりと頷いて、志希から再び目を逸らした。……いや、だから。

「美波ちゃんってさ、」

「？」

「いや、やっぱりなんでもなーい」

割と小悪魔だよねえ、美波ちゃんってさ。



玄関に足を踏み入れると、即座に志希からバスタオルを渡され簡単な指示を出された。無言で示された行先は、どうやら浴室のようだ。シャワーを浴びてこいという意味らしい。

いっぞや志希が言っていた。嗅覚が特化している人間には外の空気は大分汚く、とてもではないが堪え難い匂いだそうだ。教室からよく抜け出すのも、沢山の生徒達の匂いが入り混じって堪えられないかららしく、そういった能力がない美波にとっては志希が潔癖なようにも感じた。早めにシャワーを済まし、リビングへ向かう。ソファに座りながら何やら書類を見ていた志希は美波の存在に気付き、入れ替わるように浴室へと向かっていった。

しかし、ここは人様の御家だ。美波はどうすればいいのかが分からない

かった。自分もソファに座って、待っていても良いのだろうか。取り敢えず、控えめに志希が座っていたソファの端へと腰を下ろす。

「凄いなあ……！」

くると部屋を見渡してみると、ボードや壁一面には長い数式の羅列、テーブルには外国語で記された書類の山、遠くには実験器具などもずらりと並べられていた。初めて志希の部屋へ訪れたけれど、色々なことに對して驚きを隠せない。

学園ではただのサボリ魔なのに、世間ではやはりα性のエリート、そして『天才』と言われている少女なのだとギャップに笑ってしまう。年齢が自分と変わらない彼女は、色鮮やかな液体や実験器具、数式、本の山で囲まれている生活をしていた。

「本気で……化学が好きなんだね」

美波は愛おしそうに、くすりと微笑む。初めて志希と逢った時の日を思い出したからだ。

あの時の志希は、真剣に液体を見詰めていた。その時の彼女は、実験のことしか目に映らない人間だったのに、今ではこうして会話もして、まさかこんな関係になるとは想像もしていなかった。

美波は思わず立ち上がって、壁に書かれた数式を眺めた。遠目から『Miran』という文字が見えたからだ。小難しい数式の羅列は一体なんなのだろう。もしかししたら、以前に志希ちゃんが言っていた『対Ω用のフェロモン防止剤』かな？

つつと指で壁をなぞれば、ひんやりとした鉄の感触が指に伝わる。この部屋は、一ノ瀬志希そのものを象徴するかのような部屋だった。

指に伝わる温度は、とても冷たい。

なんとなく、コツリと額を壁に当てる。すると、ふとした物が目に映った。部屋の隅にちよこんと置かれているそれは、一枚入りの写真立てだった。誰との写真だろうか。美波は興味本意で、その写真立てに近付き眺める。写真には、成人した二人の男女と幼い女の子が写っていた。

男性は白衣を着ており、ぶつきらぼうに立っていた。女性の方は強気な見た目だが、ぎこちなく笑っている顔の中には照れた様子も伺える。

「その二人はあたしの両親だよ、美波ちゃん」

背後から急に声が掛かり、驚いて後ろを振り向く。志希がくつくつと笑いながら、タオルで髪を拭いていた。ふわりとした長い髪からはぼたぼたと水滴が床に滴ってしまっている。タンクトップに短パンというラフな姿は、いつもカーディガン姿しか見ていない美波にとって新鮮だった。

「あの、勝手に見てごめんね？ 志希ちゃん」

「んー？ 別にいいよ」

「もしかしただけど、志希ちゃんってずっと一人暮らし……」

「そういえば、喉乾かない？ 冷蔵庫から勝手に飲んでいいよ」

そう言った志希は、再びどこかへ行ってしまった。

その態度から、この質間は彼女にとってタブーなのだと瞬時に悟る。はぐらかし方がいつもよりも雑で、下手だった。どうしたものか、折角だからと冷蔵庫を開けてみる。

「つて……」

空っぽだった。ペットボトルの一本さえない。卵も、野菜も、お菓子さえ見当たる物が何もない。なんとなく確認の為に冷凍庫を開けてみても、やはり空っぽだった。氷の一つさえ入っていない。

志希の体温がいつも冷たく体力が無いという点で、なんとなく想像はしていたけれど、あまりにも酷い。これだと冷蔵庫の存在意義さえ危ういのではないかと。美波はすつと立ち上がり、きよろきよろ辺りを見回した。当たり前に、書類や実験器具しかない。非常食さえ無いみただった。

「落ち着がないねえ、美波ちゃん。はい」

「志希ちゃん！」

すると、横からすつとペリエの瓶を渡される。どこから持ってきたのだろう。肝心の志希は、あつけらかんとした表情で一口二口と飲み物を飲んでいた。この場所以外にも、もしかしたら冷蔵庫があるのかな？

「志希ちゃん、ちゃんとご飯食べてる？ ……冷蔵庫空っぽだったよ」

「ああ……。んにや、食べてるよ。ピザをよく食べてる」

「ピザ？」

「そ、宅配ピザ。それにタバスコをどつさりかけて〜」

「ちよつ、ちよつと……！」

「んにや？ なにかにやあ？」

「ま、毎回ピザしか食べてないの……？」

「うん、まーね。料理得意じゃないし、お腹空かないし」

案の定という解答に、美波はがつくり肩を落とした。この場所以外にも冷蔵庫が在るのかも、なんていう想像はあつさりと打ち砕かれてしまったからだ。渡された瓶も、冷えていない。常温だった。

こういう時に、美波はどう反応をしていいのが分からなかった。志希という人間が気分屋でマイペースなことは知っている。

そして多分、パーソナルスペースが広くないことも。両親のことをはぐらしたのだから、これ以上は詮索するなと釘を刺されたのだ。

「ただ、ただどね、志希ちゃん。やっぱり私は……」

「心配だから、ちゃんとご飯食べよう？ ね」

「しん……？ なんで？」

「何でって、それは」

「別に心配なんてしなくても、人間はいつか死ぬし問題ないよ」

「しき……っ」

「悲しむ人もいないからね」

目の前の少女は、至って本気で発言をしているように見えた。ぼつり

と最後にそう呟いた志希は、顔色も変えずに再びぼたんと扉の向こうへ去ってゆく。

それから志希は数時間もの間、暫く帰って来なかった。

ふあつ、大きな欠伸を一つ。志希は適当な道をふらふら彷徨っていた。本来なら今頃は、と想像しながらも結果として自分自身の幼さが勝ってしまったのだ。美波に写真立てを見つかったのは計算外だった。否、そもそものがあそこに置いていたら、見つかってしまうだろう。志希の単純なミスだ。

それに、美波に非がない。単なる、志希の八つ当たりだった。家族のこととは自分にとって、あまり触れられたくないものの一部だ。

だから、それ以上は踏み込まないように釘を刺した。彼女もそれを理解した筈だ。なのに、美波は志希の心配を続ける。ご飯なぞ、食べなくなったら食べればいいし、眠くなったら寝たらいい。人間はいつか死ぬ。仮に、死んでも両親はきつと気付かないだろう。遥か遠くの異国の地にいる両親には……

「まるで……反抗期のこどもみたいだにやあ」

くつと自嘲気味に嗤った。

ああ、ナルホドねえ。美波ちゃんは、まるであの人に似てるんだ。

そう、あたしが大好きだったあの人に。

「……帰ろっかな」

携帯の画面を照らして見ると、時刻は夜の七時になる数分前だった。この時間なら、もう既に彼女も帰っているかもしれない。申し訳ないが、気分が冷めてしまったから丁度良かった。あの感情のまま、彼女を抱いていたら罪悪感しか湧かない気がする。

あたしらしくないね、誰かを大切にしたいって思うなんてさ。

志希は微かに鼻を鳴らして、ゆっくり自宅へと足を進めていった。

「ナニ、これ？」

自宅の扉を開ける数メートル前から、良い匂いが漂っていた。夕飯の時刻だったので、隣の家の食卓の香りだろうと、志希はその匂いに対して特に何も思っていなかった。お腹が空けば、また宅配ピザを頼めばいい。近所のピザ屋のメニューには、確かパスタもあったと記憶している。タバスコもどっさり掛けよう、そう考えながら扉を開けた。――瞬間、

目に映ったのは彩り豊かな食卓だった。

いっぶりに食べるのであろう物ばかりが、食卓にぎつちりと乗せられていた。

……肉巻き？ 志希はひよいと一つ摘み、口を含む。噛んだ瞬間、中からじゅわりと肉汁が溢れ、具のえのきと葱はシャキシャキとした食感で食べ応えがある。まだ、おかずは仄かに温かい。

ひたりと冷たい汗が背中を伝った。帰っていなかったのだろうか、彼女は。置き去りにして家を出たのに、それでもまだ自分のことを心配していたのだろうか。

「みな……」

部屋を見渡すと肝心の料理を作った本人、美波ちゃんはすやすやと寝息を立ててソファに眠っていた。その姿に志希は何故かホッと安心した。ゆっくりと近付き、さらりとした髪を優しく撫でる。気配を察知したのか、彼女は薄っすらと瞳を開けた。

「し、きちゃ……？」

「うん、ただいまー。美波ちゃん」

「夕飯……作っておいた、よ」

「うん。……ありがと、今から食べる」

「材料も、買っておいた……から」

眠いのだろう、どうにも会話がのんびりしている。ふにやりとしたトーンのまま、美波は志希を見詰めて必死に会話をしていた。……材料、

ねえ。買われても、志希ちゃんは料理しないんだけどな。

しかし、今の状態では美波に反論しても無意味だろう。無言のまま、頭だけを撫で続けていた。発情期で料理を作ることすらも大変だった筈なのに。新田美波という女性は、志希が想像をしているよりも強い人だと感じていた。冷たくしても、あしらっても、彼女は自分に近付いては微笑み掛ける。

「だから……」

「うん？」

「あとで、また……作りに来るね」

美波はそう言って、再び臉をゆっくり閉じた。

「あー……うん、」

くしやりと志希は前髪を押し潰す。狡い、そう思った。

独りじゃないよ、そう言われているみたいで、なんだか悔しかったのだ。心の内を覗かれるのが、酷く嫌いだ。他人は他人、自分は自分。そう思いながら生きてきた。それなのに……—

そんなあたしが、テリトリーに誰かを入れて、拒否をしないだなんて人生ナニがあるか分かったもんじゃないね。ねえ、美波ちゃん？

■ ■ ■ ■ ■

生半可な気持ちでは、駄目なのだろうなって思った。

それは、美波がしつこく志希を付き纏っていた時から考えていたことだ。まだ高校生の女の子が、一人で居て淋しくない訳がない。普通にお洒落やお喋りだったしたいのかもしれない。面倒臭いと言いながら学園に来ているのも、天邪鬼な志希ちゃんのことだから……—

「ちゃん。……なみちゃん、美波ちゃん！」

ゆさゆさ、ゆさゆさ、体を揺すられる。懐かしい夢を見ていた。随分と、懐かしい夢だ。美波が志希に対し、期末試験の挑戦を叩きつけた時の夢を見ていた。あの時の彼女と、今の志希は何も変わっていないのだろうか。

ゆつたりと臉を開けると、ふわりとした赤味を帯びた茶髪が頬を掠めた。

「あ、やつと起きたー。もう九時だけど」

「く、じ……？」

「そ、九時。親が心配してるんじゃない？」

「く、く、九時？ えっ!？」

「にやはは♪ 鶏みたいで面白いねー、美波ちゃん」

ガバツと勢い良く起き上がる。志希は愉快に笑っていた。

夕飯を作り終えてから二時間程、美波は完璧にソファで熟睡をしてしまったらしい。携帯を起動すると案の定、母から何軒か着信が入っていた。掛け直さなきゃ！ 慌てながら通話ボタンを押し、席を立つと、志希がひよいと背後から手を伸ばし携帯を取り上げてくる。通話中になった画面に、美波はさっと青ざめた。両親は特に厳しい訳ではないけれど、かと言って着信を何件も取らずにいた今のこの電話に、志希が対応するのは不味い気がする。

「(ちよつ、ちよつと志希ちゃん!? 携帯返して!)」

ひそひそ声で志希へ必死で訴えるも、彼女は人差し指を口に添えて、それはもう聞いた事のない丁寧な口調で、美波の母親に「今日は志希の家に泊まること」「着信を取れずに申し訳なかったこと」を謝罪していた。

そうして数分後、志希は通話ボタンをタップしてから、美波にボイと携帯を渡し、ソファに座り直したのである。あまりの変わり様と素早さに、思わずぽかんと呆氣にとられてしまった。

「あの、……誰？」

「は？ 志希ちゃんだけど」

「い、いやいや……!?」

「……失礼じゃない？ 敬語を使えないと色んな場面で困るでしょ。これくらいはフツーだよ」

言われてみれば、忘れがちになってしまいが彼女はエリート中のエリートだ。お仕事での取引なども頻繁に行っているのだろう。普段の志希と接している美波にとっては、先程の彼女に違和感しか感じられなかったけれど。

「夕飯」

「？」

「美味しかったよ、ありがとー」

「……どう致しまして？」

「何で疑問系？ また作りに来るんでしょ？」

「い、いいの？」

「うわっ、いい笑顔。ていうか、あたしにそう言ってたじゃん？ 覚えてないの？ ……ま、いいや」

ぼんぼんと志希はソファを叩いて、美波に隣へ座るよう促した。覚えていないの、そう問われてしまえば正直よく覚えていない。なんだか寝惚けながら会話をした記憶があるけれど、内容自体は覚えていなかった。沈黙が数分続いた後、志希はぶっきらぼうに美波へ向かって物を投げ渡した。突然のことに、慌てながらキャッチをする。

「合鍵、あげる」

それだけ言って、志希はソファから立ち上がった。きょとんとしながら志希と鍵を交互に見ると、彼女はリビングのドアノブに手を掛けて、数秒だけ立ち止まった。

「志希ちゃ……」

「あっちで待ってるから」

「……え？」

「今日はあたしに抱かれに來たんでしょ？ ……あっちの部屋で待ってるから」

ところで、美波は夕飯を作ったことに大変満足をしていた。

だから、作り終わってからパタリと充電が切れたかの如く、人様の御家なのにソファで寝てしまったのだ。いつもの真面目な美波なら、こんな失態をする訳がない。

それに、志希がお散歩に出掛けていた間に菓を飲んでから料理を始めたので、辛いことには変わりがないがある程度ならば抑制が効く。だから、忘れていた。今日の本来の目的に。

ぱたんと静かに扉が閉じた後、今日は何故志希の家に訪れたのかをようやくと思ひ出した美波は顔を手で覆いながら、暫くの間俯いてしまった。

ベッドに転がり、すんと鼻を鳴らす。

フェロモンの匂いは、放課後よりも落ち着いていた。それにしても二時間、ソファで眠っていた美波に無心を保つのは神経が疲れた。じわり手に汗が滲む。部屋越しからでも、フェロモンは常に志希を捕らえて離さず、考えが一向に纏まらない。Ωの発情期は何も手に付かなくなるというが、これでは自分もまるで同じ状態だ。対フェロモン防止剤も改良が必要かによ、志希は枕に顔を埋めながら思索する。……それか愛し合う、か。

「いやいや、それはあまりにも現実的じゃないっしょ」

ふはっと声に出して笑いながら、ベッドから降りた。

真面目な美波のことだ、性欲に溺れるサマはあまり想像が付かない。別に自分自身も普段から性欲が強い訳ではない。サイドテーブルに置いてあるグラスにミネラルウォーターを注ぎ、こくりと一口だけ喉に流し込んだ。

美波ちゃんがΩじゃなかったら、そう志希は考えてグラスを静かに置いた。自分がαじゃなかったら、彼女がΩじゃなかったのなら、魂の共鳴などもなく、惹かれ合うこともなかったのに。

でも、そう考えると志希は言い様のない孤独と焦立ちを感じてしまった。ふるふると首を振り、ベッドに再び荒々しく飛び込む。考えても無意味なことは、元から考えない主義だ。志希が深く溜め息を吐いた瞬間、カチャリと扉が控えめに開いた。

「……美波ちゃん？」

「えっと、お邪魔します」

「……どーぞ」

おずおずとドアから顔を覗かせた彼女は、ゆっくり扉を閉めて志希に近づいた。魂の共鳴が無かったら、きっと今、こうしていいない。志希

はぐつと腕を引き寄せて、美波をベッドの上に沈めた。

「志希ちゃん……？ どうかしら？」

どうして、こういう時の彼女は聡いのだろう。人の感情に敏感というか、変に心配性というか。

だからかもしれない。こうして彼女を……

「別に！。なんにも」

手離したくないと思っってしまったのは。



シャツの中にすつと指が入ってきた時、美波はびくりと体を強張らせてしまった。初めて志希に触れた日は何だか難しい表情をしていたけれど、今夜も同じくらいに難しい表情をしている。志希ちゃん、そう小さく呼び掛けてみても彼女は返事をしてくれなくて。手だけは動きを止めず、いつの間にか下着姿にされていた。

「あの、志希ちゃん……何かあった？ んっ」

ひたり、ひたり、冷たい手のひらで、ゆつたりとお腹の辺りを這われる。ゆつくり、ゆつくり、何かを確認するかのように。その仕草にくすぐったくなつて、焦ったくなつてしまつて、美波は微かに身動きをした。ぼんやりとした熱が、体の奥から込み上げてくる。

「逃げちゃ駄目だってば」

「だって、……せめて電気を消そう？ は、恥ずかしいから」
ぐつとシーツを引き寄せながら、ささやかな抗議をする。やつぱり、こうしてきちんと向き合ってみると結構恥ずかしい。

恥ずかしい、ただそれだけの理由だったのに、美波の抗議に志希は一瞬だけ寂しそうな顔をした。それがなんだか気になつてしまつて、不思議

議そうな顔で志希の頬に優しく触れる。

「……ナニ？」

「……それはこっちの台詞だよ。どうしたの？ 志希ちゃん」

「だから、なーんもしてないってば」

「嘘。絶対何かあるでしょう？」

「……………」

何かと言えば、思い当たる節は一つしかない。

でも、何故それと今が関係あるのか検討がつかなかった。安易に質問をしてしまったら、きつと志希はまたどこかへ行ってしまうのだろう。それとも、自分が寝惚けていた時に彼女へ何かを言ってしまったのだろうか。

余程、不安そうな顔をしていたのだろう。はぐらかすように志希はかるく笑って、美波の下着を素早く脱がした。

「しっ……………」

「わお、美波ちゃんの裸ってやつぱりすごいねー♪ にやはは」

「志希ちゃんっ!!」

「……何もないって、なあんも。たださー」

つつとお腹を這っていた指先が上半身を静かに撫でて、首筋に届く。美波を見下ろす蒼の瞳は凍えるような冷たい色をしていた。見たことのない、深い蒼。

「もし、また番を解消するって言ったら……コロしていい？」

なんて、ね♪

ぱつと手を離れた志希は、なんともない風にケラケラと笑う。違和感しか感じないその姿に、美波は言葉を飲み込むしかなかった。

……違う、違うでしょ。本当は冗談なんかじゃないのに。両親のこと

を訊かれたくないのは、それ程までに志希ちゃんが気にしている部分だからでしょう。一人が嫌なら、寂しいのなら、声に出して。

ちゃんと、誰かに頼っても良いんだよ。ねえ、志希ちゃん。

「私は……離れたりしないから大丈夫だよ」

「つ……。あ、もしかして本気にしちやったー？ 嘘々、単なる冗談だってー。真面目だなあ、美波ちゃんは」

「寂しいなら……。っ！ 誰かに、……。私につ、頼っても良いんだよ。

志希ちゃん」

志希の気持ちの奥底に辿り着くには、生半可な気持ちでは無理だとずつと考えていた。考えていたのに、どうしたら良いのかを美波はまだ答えが出ていない。下手をしたら、もうこれから口を利いてくれないのかもしれない。それ程までに「一ノ瀬志希という十八才の女の子」は繊細な子なのだ。

「……………美波ちゃんてば、生意気。美波ちゃんのクセに、ホンット」

「志希ちゃん……わぶっ！」

不意に、キュツと鼻を摘まれる。裸姿でナニしてんだろーね、って。クスクスと笑った志希は何かを吹っ切ったような顔をして、ただ穏やかに微笑んだ。そうして、美波の額に掛かった髪を指でざらりと流してから、志希は優しくキスを落としたのである。

あたしの長い髪と、美波ちゃんの長い髪が絡み合うだけで、何故か精神的な幸福感を覚えた。

「っ、……あ、しきちゃ……っ」

ギリツと背中を立てられた爪が痛い。大体にして、こっちだって余裕がないつつの。そう心の中で悪態を吐くと、美波ちゃんは更に爪を食い込ませた。優しく触れれば触れる程、彼女はとても良い声で啼く。発情期特有なのかは知らないけれど、今の美波ちゃんは全身が性感帯になっっているみたいだった。

志希が彼女にキスをした後、それがまるで始まりの合図かのように二人は求め合った。なるべく怖がらせないように、この上なく丁寧にゆっくりと美波へ触れた。舌でちろりと胸を舐めると、力加減がくすぐったいらしく笑われた。あたしも初めてなんだけど、って不貞腐れたように言い返すと彼女は嬉しそうに微笑んだ。

初めてだったから、なるべく優しく抱きたかった。色欲に溺れる彼女も見てみたいけれど、なにも今日でなくもいい。ずっと彼女が大切にしてお守ってきた体をむやみに傷付けたくなかったから。耳、首筋、胸、背中、お腹とゆっくりゆっくり舌を這わせる。それなのに……

「背中、いたい」

「だ、だって……っ」

どんだけ爪を立てれば気が済むんだ、この生徒会長サマは。全身性感帯ならとことん虐めてやろうか。

どうやら美波ちゃんは、耳と背中が弱いらしい。そういうえば、ブレザーの上からでも感じていたなあと出した。意地悪く、ぴちゃりと音を立てて耳を舐める。即座に、とんと軽く抗議するように肩を叩かれた。今度はなんだとばかりに顔を覗き込めば、案の定とでもばかりに美

波は涙目になっており、志希の加虐心を更に煽られてしまう。

「……って」

「うん？」

小さく震えながら、美波は何かを言っている。

でも、それがとても小さくて。耳を傾けて聴いてみても、掠れたように聴き取りづらい。とうとう美波は観念をしたように、目を逸らしながら志希へ訴えた。

“下も触って” って。

思えば、大切にしようとして上半身しか触れていなかったと気付いてから笑ってしまった。別に、焦らすつもりはなかったのに、美波によって中々にもどかしかったのだろう、志希の触り方は。

彼女の望み通り、指先をゆるりと下半身へ運ぶ。つうつと指先で確認すると、秘部は充分に潤っていた。くつと爪先で秘芯を引っ掻くと、美波はびくりと体を震わせる。その反応に、志希はいつも説教ばかりをしてくる彼女が、こうして自分の腕の中で感じているのが面白く感じて、更に指の腹で突起を擦った。じっくり、ゆっくり、美波が抗議の肩を叩くまで。

「っ、あ、やだ……っ、そこ、ばっかつ、ん、んんっ」

叩くのと同時にかかるく果てたみたいだけど。

志希は笑う。余裕のない彼女を見るのがとても好きだ。鼻歌混じりにそのまま指を秘部に沈めてゆくと、とっぷり二本も飲み込んでしまった。何回か自慰行為をしたのだろう、それでもこれから挿れるモノは大部分痛いモノだけれど。ちゅぶ、ちゅぶ、美波の秘部から溢れ出る蜜がやけに厭らしく響く。ぼたりと滴る自身の汗が、ベッドを僅かに濡らしていた。あつい。

「美波ちゃん、痛くない？」

「い、たくない、けど……っ」

けど……？ じつと見詰めながら言葉の続きを待つと、不本意だと

ばかりに可愛らしく睨みつけられる。……あたしは怒られるようなコトはしてないんだけど。

「そろそろ、い……て良いから」

「ん？」

「だから……っ、し、しきちゃん、辛そう……だから、……挿れて、いいから」

「……っ、」

ああ、と納得をする。

確かに、志希の体力が限界を迎えそうだった。滴る汗が尋常ではない愛撫をしている側が、何故こんなにも疲れているのか。答えは明白だ。

あたしはそれくらいに体力が無い。

志希は何とも言えないような表情をして、美波の脚をゆつくりと開いた。本当はもっと愉しみたかったけれど、気を失っては元も子もないというかダサすぎる。

「……痛かったら、言って」

ひたり、美波の秘部にソレを宛てがう。面白半分にかるく揺すってみただけでぬらりとした蜜が絡み付き、志希は悶えた。単に、自分の首を絞めただけの行為だった。

正直、それだけで意識が飛びそうになる程に気持ち良かったから、中に挿れたら危なさそうだと、慎重にぐぐつと押してゆく。美波は薄っすらと涙を流していた。志希の腕にしがみ付いた指からは、半端ではない力が伝わる。相当痛いだろう、言えば止めるのに。美波は必死で志希を受け入れようとしていた。

「力抜いてー。美波ちゃん」

「む、り……っ、」

「…………やめよっか？」

「……だ」

「え…………っ」

「大丈夫、だからっ。やめないで、……しきちゃ、っ」

「あ…………うん」

やめと言ってくれたのなら、自分もまだ助かったのに。……体力的な意味でも。

志希は深く息を吐いて、一気にソレを沈めていった。
優しくなぞ、もう出来る筈がなかった。



くらくら、くらくら。

全身を快楽で揺すられているような感覚だった。

必死に与えられるソレを逃さないよう、美波はぎゅつと志希の体に抱き着く。初めて感じた痛みに、とてつもない快楽に、涙が止まらなかつた。頭がおかしくなりそうだ。

ぼんやりと映る志希の表情は、自分と同じくらいに余裕がない。珍しかった。志希はいつだって、飄々としているから。その姿がとても愛おしいものに感じた。

「っ、あ、はっ、…………んっ、」

押して、引いてを繰り返される度に、気持ち良さでどうにかなりそうになる。擦られる部分が一々弱い部分を刺激されて、そろそろ限界を迎えそうだった。ぎゅつとひと際強く抱き締めると、ふと志希から話し掛けられる。その間も腰の動きは止めてくれず、ぐんぐんと込み上げる快楽の波に美波は飲まれてしまった。

「っ、あ、はっ…………し、しきちゃ、…………っああ！」

志希の高いソプラノ声が、頭の中で遠くから聴こえた。

はっはっ浅い呼吸を数分繰り返した後、志希は息そうに身を起こして、美波にミネラルウォーターを手渡した。大人しく受け取り、勢い良く喉に流し込む。今回はどうやら、志希ちゃんは気を失わずに済んだ様子だ。

そう微笑めば、志希は心底嫌そうな表情を浮かべて美波から背を向けた。彼女なりに一応、気にしている部分ではあるらしい。なんだかその姿が可愛らしくて、美波は志希の背中へそつと静かに唇を押し付けた。

「もしかして……まだ足りないの？ 美波ちゃんは」

「ちっ、違うよっ！」

「ふん？」

「またそうやって人をからかう……」

ふつと彼女から離れようとすると、背中越しに指先を捉えられた。きゅつと絡められた指は、幾分か温かい。いつもの冷たい指先が、ほんのり熱を秘めている。

「……………ねえ、志希ちゃん。なんて言ったの？」

「ナニが？」

「あの時、何か言っていたでしょう？」

そういえば、余裕がなくて聴き取れなかったけれど、自分が果てる前に志希から何かを言われた気がする。気になって、素直に訊いてみることにした。率直に質問をすると美波の方をくると向いて、志希はニンマリと笑っている。あ、嫌な予感。

「なんの時？」

「な、なんのって、……その、」

「ん？」

「志希ちゃん、分かっているって訊いてるでしょう？」

「にやはは！ 冗談♪ ……明日の朝は目玉焼きがいいなーって言っただけ」

「嘘吐き……」

「バレたかー。まあ嘘だよ」

くるくる、くるくる、志希ちゃんは私の髪を指先で遊んで、どこかの知らない外国の歌を口ずさんだ。体力のことも心配をしていたけれど、こうしているのなら本当に心配は要らないみたいだとホッと安堵する。でも、残念なことに質問へ答えてくれる気はなさそうだった。きつと、これ以上は訊いても答える気がないのだろう。もう訊くのはやめることにした。

それよりも、口ずさんでいる歌がやけに心地よい。程良いソプラノ声、美波の心と体を優しく包み込み始めていた。ふわふわとした眠気がゆつくりと瞼を閉じさせる。その間、ずうつと美波と志希は片手を繋いだままだった。

そうして、とうとう眠りの世界についた頃。

志希は愛おしそうに美波を見詰めて、ゆつくりと瞼にキスを落としたりした。

± S M

— 二人の距離 —

さてさて！ ここからはどうやら、番外編になるみたい。

んっと、ナニナニ？ こういう作品が読みたい。アンケート結果によると『あたしと美波ちゃんがショッピンングへ行く』選択肢が見事一位に輝きました、か。ナルホドねえ、確かに本編では甘い匂いは兎も角、内容自体はそんなに甘くなかったもんね。志希ちゃんなんて、常に美波ちゃんのフェロモンと闘っていたし？ ……はふう。

ああ、いや別に嫌いじゃないよ、ショッピンングは。勘違いをされやすいけど、メンドーなコトが嫌なだけで散歩は好きだし、テキトーに歩いていたら新しい発見が見つかるかもしれないからね。あでも夏は暑くて家から出ないやあ。暑いのは苦手だよ。

んにや？ なんだか、あたしが嫌そうな顔をしてるって？

あゝ……。ほら、なんていうかさ、美波ちゃんってデートに映画とかを提案してきそうじゃない？ あたし苦手なんだよね、興味が湧かないただの作り話を約二時間近くも観続けて、椅子に黙って座らせられるの。すっごく苦痛。むりむりー、志希ちゃんには無理です。

お出掛けは好きだけど、美波ちゃんとは色々合わないさそうだしやあ。いや、てか絶対に合わないでしょ。この番外編って大丈夫？ 一悶着あったりしない？

……ま、別にいいけどさ、美波ちゃんが相手なら。

「じゃあ……映画でも観に行かない？ 志希ちゃん」

「却下」

口に含もうとした卵焼きを一旦置き、志希はげんりとした顔付きで美波の方を見た。

お願いがあるのだけど、そう言い若干の緊張感を漂わせながら、こちらの顔を慎重に伺い、彼女が志希へ話を切り出したのが一時間前。

番となった今、別れ話は早々に無いだろうと思っていたけれど、彼女があまりにも言いづらそうにしていたので、志希は何事かと微かに構えて言葉の続きを待っていた。また知らない間に彼女を傷付けていたのだろうか。なんでもない風に雑誌をバラバラと捲るが、内心では結構考えていたりもする。なにせ自分には前科が二回ある。

あの泣き顔だけはもう見たくない。

はあ、と溜め息を吐き彼女の方を見る。沈黙が長い。無駄に長い。待つのはあまり、いやかなり得意じゃない。考えることは苦手じゃないけれど、美波ちゃん相手だとよく分からないし。だからさ、別に嫌いになつたりしないから素直になんでも……—

「あの、美波ちゃ」

「志希ちゃん！ 明日、良かったらデートしない？」

「……………は？」

頬を真っ赤にさせながら、彼女は志希の返答を待っていた。何事かと心配していた志希にとって、その言葉があまりにも予想外れで拍子抜けをする。ボタンと雑誌を閉じ、ベッドへ放り投げると志希は美波を抱き寄せた。なんだか悔しい気分だ。

どうにもこうにも、あんなに疎ましく思っていた彼女を今では大分お気に入りになってしまった。首筋にゆつたりと唇を這わせれば、美波の肩が面白いくらいにびくりと跳ねる。

実を言うと、これだけお泊りをしているのにも関わらず、更に言えば抱き合った仲にも関わらず、二人はまだ一度もデートをしたことが無い。家の合鍵を渡してから、美波は定期的にご飯を作りに来ており、最初は週に二回くらいの頻度で足を運んでいた。

しかし、一向に料理をしようとしないう志希を見て、今では週の半分くらいの頻度で志希の家へ通うようになったのだ。

「どうやら、きちんとした栄養を摂っていないことが心配らしい。当の志希は、相変わらず食に対し執着が無かったので、今でも一人になるとよく宅配ピザを頼む。そうケラケラ笑いながら彼女へ話せば、すうっと目が鋭くなりちよっとしたお怒りモードへと移行したので少々懲りた。それから、仕方なしにネットで適当に材料を注文し、中身だけはやら充実にしている冷蔵庫を完成させたのである。（結局、料理自体はしないので何回も材料の賞味期限を切れさせている。）」

真面目な彼女は、どうやら家族の人へ番が出来たことをきちんと報告したそうだ。おかげで、急に帰りが遅くなったことに対して理解をしてもらえたらしい。お泊まりをしていくことも増えた。

但し、節度を持って行動をすることと念を押されたらしいが、まあ無理もない。

「あ、の……志希ちゃん」

「別に、デートくらいあたしも付き合うけど」

はてさて、これでは恋人というよりもどちらかと言えば、二人の間柄は通い妻かセックスフレンドに近い気もある。そんなつもりは微塵もないけれど、その行動だけを捉えたら彼女をまた不安にさせてしまっていたのかもしれない。

「……っ、ふっ、あ」

「美波ちゃん、良い匂いがする」

さて、この悔しい気持ちをどう晴らすかにやあ。

ぺろりと舌舐めずりをしてから、つつつと首筋をゆったり舐める。疎ましいと感じていた声が今では聴きたくて堪らない。透き通るソプラノ声が甘美なものを含み始めた瞬間、その気持ちは加速した。

そう、悔しい気分だったのだ。彼女相手に身構えてしまったのは勿論、こうして実はデートに誘われて嬉しいと感じてしまったことも。彼女

の逃げ道を断たせる為に腰へ手を回し、優しくシーツの上へと沈める。吃驚したように見開かれた瞳。やつぱり、美波ちゃんの慌てた顔は面白い。にやんで、ね。

「志希ちゃん、……あんまり意地悪しないで」

「にやはは♪ バレた？ でも、触れたい気持ちは嘘じゃないよ？」

「っ……、まだお昼だから」

「じゃあ夜にはシよっかー♪」

「もう……っ！」

パツと手を離すと美波は慌てながら起き上がる。何回か抱き合うようになったのに、彼女は一向にこういう行為には慣れないらしい。くすぐす楽しそうに笑えば、美波は戸惑うように微笑んだ。最近では志希が本気なのか冗談で言っているのかの、区別がつくようになったと美波は言っていた。

「そういえば、デートってどこに行くの？」

「えっと、」

急にしどろもどろになった姿へ首を傾げる。まさか、こうもすんなり了承を得られるとは思ってもみなかった様子で、行き先は全く考えていなかったらしい。おまけに「志希ちゃんは外出するのが苦手な人間か」と思っていた」とも。

ふむ。考えてみたら、主に部屋へ引き籠もり、実験をしているものだから彼女がそう勘違いするのも無理はない。買いい物も必要最低限のものだけだ。思えば、あたし自身も美波ちゃんの好きなものや誕生日、血液型さえ知らなかった。

「お昼ご飯でも食べながら、プランを考えてみるね」

「んっ……そういえばさ、」

「？」

「美波ちゃんって、誕生日はいいつなの？」

「誕生日……？ 七月二十七日だよ？」

「うわ、真夏じゃん。美波ちゃんの熱い性格は生まれた日が関係しているのかにゃ〜……」

「あの、唐突に訊いてきた挙句に引かないでくれる？」

「……ま、いいや。プラン決まったら教えて」

「？」

不思議そうにしながらリビングへ向かっていった美波をよそに、志希はベッドの上に置いた雑誌の表紙を見ていた。

「というか、もう過ぎてるじゃん。」

先程まで読んでいた雑誌には、女性が喜ぶクリスマスマスプレゼント特集が載っていた。クリスマスまでには、まだ二ヶ月程早い。

だが、雑誌には今から夜景の綺麗なホテルを予約するべし、など色々書かれてあった。ふあ、と大きな欠伸を一つ。志希はうんと微かに思案してから、のそりとベッドから腰を上げた。……プレゼントねえ。

そうして再び、冒頭の場面へ戻る。

やつぱり美波とは性格が合わないと思っただからこそ、一緒に居て飽きない部分も多々あるのだろうけれど、デートプランとそれは、今は別の問題だ。

「映画なんてただの作り話じゃん。却下」

「ノンフィクションならいいの？」

「……志希ちゃんが二時間もジツとしていられると思う？」

「思わない、けど」

美波は腑に落ちない表情をしながらも、映画という案を破棄してくれたようだ。志希はやつと卵焼きを口へ含む。ふわふわで味がしっかりしていて美味しい。ピザにタバスコをどっさり掛けた刺激物が好きだったのに、いつの間にか美波の作る手料理も同等なくらい好きになっていた。

どうしたら、この味が再現出来るのか。人には得手不得手があるものだが、志希はとことん料理が苦手だった。料理の味だけではない、それを作る為の段取りや手間もよく出来たものだと思心をする。冷凍食品なら電子レンジで温めて終わりだし、宅配ならただ待てばいい。わざわざ手間暇掛けて料理を食べたいとは思ってもいなかった、美波の料理を食べるまでは。

卵焼きを食べ終え、箸が自然と次のおかずを掴む。豚の生姜焼きは食べやすいサイズに切ってくれていた。ご飯とよく合う。

「美味しい？ 志希ちゃん」

「……うん？ うん。美味しいよ、すごく」

「そっか、良かった」

ふつと目を細めて微笑む美波に、志希は自分が前と比べて大分変わったことを実感していた。

こうして食卓に座り、茶碗と箸を持つことも久しくしていなかったと思う。ビジネスの場ではきちんとした身形と行動をするが、私生活では実験以外のことに關しては無頓着な人間だということを志希自身は自覚していた。実験と、趣味に香水の調合を偶にして、また実験をする。その空間に、志希と実験道具以外のものは必要がない。

そういう生活をしていたのに、美波と出逢い、番となった今では実験道具や本以外にも大切なものが出来たように感じた。じわじわと込み上げてくる、くすぐったい“ナニか”。ちょっとだけ、美波ちゃんの笑顔は狡い。

「……………服」

「ん、何か言った？ 志希ちゃん」

「最近寒くなってきたし、新しい服でも見ようよ。近くにおつきなショップPINGモールが出来たでしょ？ ……映画は嫌だけど、シヨッピングならいいよ」

「う、うん……！ じゃあ明日、そこに行こうね」

「ん。ご馳走さまでした〜」

「はい、お粗末様でした。茶碗は私が洗うから置いていいよ?」

「うんにゃ。それくらいはやるよ。ていうか……、流石にしないとヒトとしてやばいでしょ」

そそくさと逃げるように椅子から立ち上がる。むずむず心をくすぐるそれは、今のあたしの表情を緩ませた。ちらりと横目で見える美波ちゃんも嬉しそうにしていって、何故だかあたしが照れてしまう。

ああ、もうだから……—あたしは美波ちゃんの笑顔に弱いんだっ
てば。



—夜。美波はお風呂から上がり、念入りにお肌や髪のカアをしてから寝室へと向かった。そうして、扉を開けた目の前の光景を見て、美波は少しだけ、がっかりしてしまった。

ベッドで珍しく寝息を立てている志希が居たのだ。夜行性の彼女が自分より早く眠ってしまうのは珍しい。美波は手を伸ばし、半乾きのふわふわの赤い髪を手で優しく撫でる。ふにやりとした無邪気な表情を浮かばせながら、彼女は夢の世界を堪能していた。

「……誘ってきたのは、志希ちゃんのくせに」

昼間のこと、からかいながらも夜にはしようねって言ってきた志希の言葉に、正直期待をしていた。だからこそ、念入りにお風呂上がりはカアをしてから寝室へ来たのに。美波はちよつとだけ残念そうにしながら、むにやむにやしている志希を見て、口元が綻んでしまった。可愛
い。

まだ眠くなかったので、その寝顔を眺めるようにベッドへ寝転がってみる。時刻はまだ二十二時前だった。志希ちゃんの睫毛、長いなあ。

「ねえ、……志希ちゃん。もう寝ちゃった?」

一度だけ、小さく呼び掛けてみる。返事はなかった。

どうやら本当に、彼女は眠ってしまったらしい。わざわざ起こすのも可哀想なので、美波は志希の中途半端に掛かっている毛布をきちんと掛け直してあげた。寒くなってきたこの時期には、暖房を点けているとはいえ、そろそろ毛布一枚では風邪をひくかもしれない。もう一枚、上にタオルケットでも掛けてあげようかな。そう思い、美波がベッドから出ようとした時だった。

「きやつ!」

ぐんつと背後から力強く引つ張られ、抱き締められてしまったのだ。

「し、志希ちゃん……?」

やつぱり起きていたのかな。そろり、背後の志希を見ようとしても、抱き締められた力は案外強いらしい。体勢を変えるには難しいようだった。それに、志希の返事は無い。志希ちゃん、再びそう静かに呼び掛けてみてもやはり返事は返ってこなくて、代わりに耳許で聴こえてくるのは彼女の規則正しい穏やかな寝息。というか、これはこれで……—

「……っ、」

くすぐったくて堪らない。普段の志希が悪戯つ子な部分もある所為か、最初は狸寝入りかもしれないと考えていたけれど、本当に寝ているのなら無闇に動いて起こしてしまうのは憚られる。かといって、この状態は流石に美波の方が辛くなりそうだった。

ふつ、と規則的なリズムで耳へと響く呼吸音。くすぐったさと共にむずむずとしたものが混ざり合って、変な感覚が背中に走る。——だって、期待をしていたから。

今夜は志希ちゃんと一緒に、そう期待をしていたから。好きな人にも与えてもらえる筈だった愛情。疼く下腹部に、美波はぎゅつと目を瞑り、意識をそれから逸らそうとした。ぴつたりとくつつかれた背中には、志希の身体の柔らかさが伝わる。体温が低めな彼女の手が、今はやけに熱

く感じた。

「っ、し……っ、志希ちゃん。……………起きて」

このままでは自分がおかしくなりそうで、美波は慌てた様子でいまだ寝ている志希へ声を掛ける。起こすのは可哀想だと考えていたけれど、仕方がない。Ωの性質は生易しいものではないから、この状態が続いてしまえば確実に美波は欲してしまう。

それなのに、必死で呼び掛けた美波の声に、志希は微かに身動きをしただけだった。夜行性の彼女が寝ているのは勿論のこと、ここまで眠りが深いのも珍しい。それだけ、自分の傍が彼女にとって安心が出来る居場所になっているのだろう。……今は素直に喜べないけれど。

「しき、……っ、んっ、!?」

ふと、志希の腕が緩まる。ようやくと解放された。

そう、ホツと安堵したのも束の間だったらしい。腕に再び力が入り、美波のことをがっちり抱き締め直したのである。吃驚して変な声が出てしまい、思わず口元を抑えてしまった。起こすつもりだったのに、自分から溢れた声があまりにも普段とは違うものだったから、焦る気持ちだけが込み上げてくる。

それに、抱き締め直された志希の手があまりにも美波にとっては悪い位置で。その、微かに指が……………

「お、起きて……………」

無意識なのだろう、びくりと背中が震える。リズムの良い呼吸音、美波の胸に触れてしまっている志希の指、温かく感じる肌と肌に、じわじわ熱が帯びてくる。疼く美波の下腹部は、既にショーツを濡らしてしまっていた。彼女の呼吸とは裏腹に、自分の呼吸はただ浅く繰り返されるだけの必死なものになってしまう。……志希ちゃんの馬鹿っ！

心の中で彼女へ怒りつつも、やはり起きる気配はない。どうしよう。

生理的に浮かぶ涙を抑え、起きない志希と熱を帯びてしまった自分の身体を考えて、ひどく困惑する。番の志希の匂いも然り、この部屋全て

が彼女に抱き締められているかのようで、気分がおかしくなってくる。何度が抱かれたベッドの上、密着した志希との体温、じわじわと昂ぶり続ける欲、美波の理性がぐらぐら壊れ始める。以前は薬を飲んでいれば、慰めなくても平気でいられたのに。志希と番になり、何度か愛し合う内に、欲の我慢が出来なくなってしまうた。

「……っ、んっ」

こくりと息を飲む音が、やけに部屋へ響いた。じんじんと熱くなったそこに、美波はその体勢のまま恐る恐る指を伸ばしてゆく。どうしたって、この状態のままでは眠れる筈がなかった。かと言って、わざわざ起こしてまで抱いて欲しい訳ではない。

ならば、今は——どうか、起きないで。

そう願いながら、ショーツの中へと指を忍ばせる。ゆつくりと慎重に触れたそこは、淫らな音が聞こえてしまう程に濡れていた。ぬるりとした液体を指に絡ませ、人差し指で秘芯を擦る。力なぞ殆ど入れていないのに、ただ触れただけに近い刺激に身体が大きく震えた。

「っ、あ、……ふっ、んっ、んんっ」

こんなことをしてはいけないのに。

背後で眠り続けている志希への背徳感からか、すぐに果ててしまいたいそうになる。起きないでほしいと願う気持ちと、気持ち良さに任せ指の動きに、罪悪感と快楽で美波は声を押し殺して泣いてしまった。

途端、美波を抱き締めていた腕に一層と力が籠もる感覚がする。ドクリと心臓が跳ねて、指の動きを止めてしまった。規則正しく聴こえていた彼女の呼吸音が、今は耳に届いてはいない。

「あ、の……し、志希ちゃん、……………」

「あー……えっと、その、ごめん。美波ちゃん」

眠っていたのは本当で、さつき起きたばかりなんだけど。

そう罰が悪そうにしながら、志希は戸惑いつつも瞬時に状況を察して、美波の指に指を重ねた。

「志希ちゃん、えっと、大丈夫……だから」

「……………うん」

「その、今のは、見なかったことに、して」

「……………やだ」

愛液が付着した美波の指に志希は指を絡ませながら、ふっと悪戯気に笑って囁いた。まだイけてないんでしょ？　　って。

「なに言って……………っ！」

「嫌なら振り解いてよ、美波ちゃん」

「っ、……………んっ、んんっ」

くちゅり、くちゅり、濡れているのを愉しむかのように指が動く。確かに志希の言う通り、振り解こうと思えば振り解ける。単純な力の差では、美波の方が上なのだ。

だけど、ずっと心の底では望んでいたものがやつと与えられそうで、それを拒否する選択肢など今の美波にある筈がなかった。

そうして、抵抗をしない美波を確認してから、志希は優しく身体を反転して唇を重ねた。「志希ちゃんの馬鹿」その台詞を何度も吐きながら、美波は志希と一緒に快楽の波へと溺れていった。

2 /

ふわふわ柔らかいナニかに、優しく包まれる夢を見ていた。夢の世界にいる筈なのに、不思議と夢の中の自分は冷静で、久し振りに、こんなにも穏やかな夢を見ている”と感じていた。

ま、起きたら全然穏やかじゃなかったんだけどね。

「……………ごめんって、美波ちゃん」

「なんのことかな？　志希ちゃん。はい、お醤油」

「あ、ありがとー♪　……………じゃなくて！　昨日、ほら、えっと」

「志希ちゃんにしては、随分と歯切れが悪いね。……………別に？　昨夜のこととはなんとも思っていないから」

そう言いながら、つーんと顔を逸らして黙々と遅めの朝食を食べている美波ちゃん。ああ、これって結構ヤバイやつ？

彼女の様子を見つつ、受け取った醤油を卵焼きへかける。美波ちゃんは目線をあたしと合わせないまま、お味噌汁を啜っていた。

さて、どうしたものかな。昨日の夜は寝てしまったあたしが悪かったと思うけど、別にわざと寝ていた訳じゃないし。志希は気不味そうにながらも、頭の中ではこういう時、素直に謝った方が早いのだろうと感じていた。素直にそれが出来ていたら良かったのだが。

「あ。因みに、志希ちゃん」

「？」

「その卵焼き、今日は甘い卵焼きだからお醤油をかける必要は無いと思うよ？」

「……………にやんだと、」

いつもはほんのり塩っぱい出し巻き玉子なのに、今日に限っては甘い卵焼きだなんて。いや、別に甘い卵焼きも嫌いじゃない。

しかし、それならそれで醤油をかける前に言っただけだ。一体ど

ういう意地悪なのか、訊かなくても察しはついていたけれど、流石に「それなら、先に言つてよ！」と志希は言いそうになる。言いそうになったが、ぐつと言葉を堪えたのだった。

美波と番になり、知ったこと。

それは、彼女を怒らせると地味に、いや物凄く怖いこと。負けず嫌いな性格は知っていたけれど、怒ると怖い部分は番になってから初めて知った。よく授業をサボる志希に対して、美波は窘めることがあれど、本気で怒ったりはしない。からかった時もムキになって反論をしてくるが、本気の怒りとは少し違う感じだ。

そんな彼女の唯一怒ることは、主に志希の体調面。

特に、食べることに執着がない志希は適当に口へ含める物を摂取出来れば問題なかったし、自分から唯一好んで食べる物と言えば、身体に悪い刺激物だった。そんな志希だったから、当たり前前に体力が無いし、よく貧血も起こす。

でも、最近では美波のおかげで貧血の回数もめっきり減り、常に冷たかった指もちよっぱりぽかぽか温かい。

しかし、まだ偶に貧血を起こしたり、食事を抜いたりしてしまう時には、美波は一步も引かない勢いで志希へ怒った。勿論、その怒りはごもつともな理由なので、志希はその時ばかりは反論をしたことがない。

だけど、今回は理由が違う。

先程述べた体調面ではなく、今回の原因は昨晚にある。

あたしから美波ちゃんを誘ったのに、あろうことか先に寝てしまったコト。これに関しては、百パーセントあたしが悪い。

おまけに、そのまま寝ていればまだ良かったのに最悪のタイミングで起きてしまい、初めて美波ちゃんが一人でシているところを目撃してしまったものだから、二重で申し訳がない。てな訳で、二百パーセントあたしが悪い。

もっと言えば、今日がデー・ト日なのにも関わらず、すっかり美波ちゃ

んの色気に当てられてしまい、滅茶苦茶に抱いてしまいましたとさ……。あー！ あー！ もうっ、志希ちゃんが悪かったつてば！

だからさ、いい加減に機嫌を直してよ、美波ちゃん。目が笑っていない美波ちゃんは、圧が凄くて素直に怖いんだつて。

志希は醬油をかけてしまった卵焼きを見詰めながら、はふっと困ったように息を吐いた。それに志希とて、寝たくて眠っていた訳ではないどうにも寝付きが悪く、どちらかと言えばショートスリーパーの志希が、最近では驚く程にすんと眠りへ落ちてしまうのだ。

そういう時は決まって、美波が泊まりに来た日だった。甘ったるい匂いが落ち着かない時も多いけれど、彼女が傍に居るだけで心地の良い安心感を抱いてしまうのも事実だった。

眠ることが気持ちいい、久し振りにそう感じていたのだ。

「……ふふっ、」

すると、不意に向こう側から笑い声が聞こえてくる。卵焼きから視線を移せば、ちよつとだけ面白そうに笑っている美波が居て、まだ箸を付けていない彼女の卵焼きの皿と志希の醬油がかかってしまった卵焼きの皿を交換していた。

「はい、どうぞ。少しだけ昨夜の仕返しも兼ねて、意地悪をしたくなつたの。でも、もういいから。志希ちゃんのちよつとだけ困った顔も見られたし」

そう言つた美波は言葉の通り、いつもの態度に戻つた様子だった。ホツと胸を撫で下ろしながら、盛大に安堵の溜め息を吐く。かなり心臓に悪い。そんな志希とは対照的に、美波はいまだ楽しそうに微笑んでいたあたしも大分、美波ちゃん相手に振り回されているというか。

そう苦笑いをしつつ、有難く卵焼きを頂戴する。美波が志希に怒る時、決して理不尽な理由で怒ったりはしない。その為か、逆にこうして怒っている時は“志希の方が悪い時”だという自覚を志希自身がきちんと弁えていた。

「そういえば、志希ちゃんって卵焼きが好きなの？」

「ん、いや？ なに、急に」

「えっと、勘違いかもしれないけれど、志希ちゃんって必ず卵焼きを最初に食べるから」

「ああ……」

無意識だった。卵焼きが好きというか、ねえ。

それはちよつと違うなと首を傾げる。

「卵焼きが好きっていうか、」

「うん？」

「美波ちゃんの料理が好き、かな」

「っ、」

ふあつと大きな欠伸をしつつ、卵焼きを口に含む。昨晚の疲れからなのか、はたまた気が抜けた安心感からか、ぼんやり眠たい気分だった。のんびり咀嚼をしながら、志希は小さく頷く。ああ、うん、やつぱり美味い。

だから、素直に「美波ちゃんって料理上手だね、毎日食べたいくらいだよ」って褒めてみたんだけどさ。何で今度は、そんなに顔を真っ赤にしている訳？ 美波ちゃん。

■ ■ ■ ■ ■

予定通りに着いた大型ショッピングモールで、早速服を見ようとなつた。改めて感じたことは、志希が可愛らしい美貌をしているということだ。様々な系統のお店を回り、沢山の服を試着してみたが、ふわふわの赤髪にすらりとした細い脚、綺麗な素肌、猫目の大きな瞳は、どの服を手にとっても可愛く映える。

「これ、どう？」「これは？」と次から次へと試着しながら質問を向けてくる志希に、美波はお世辞ではなく全部「可愛いと思うよ」と返し

ていたら、彼女は腑に落ちない表情をしながらも全て購入していた。その金額に美波は目を見開いてしまったけれど、志希曰くお金は無限にあるそう。変なところで、彼女がαでありエリートなのだと言再確認をしてみた。

そうこうしている内に、いつの間にか自分も試着をする羽目になつてしまい「美波ちゃんにはこれと、これ。ああ、これもかにや〜♪ 靴はこつちが似合いそう！」なんて独り言を呟きながら、それらも全て購入をして、プレゼントをされてしまった。流石に悪いから！ とお金を出そうとした美波を余所に、何食わぬ顔で次はこつちとぐいぐい腕を引っ張られ、ようやくと落ち着いた場所がクレープ屋さんだった。曰く甘ったるい匂いに釣られたとのこと。

こうしてデートをするまでは、彼女がちゃんと楽しんでくれるのが不安だったけれど、それもどうやら杞憂らしい。ふんふん鼻歌を歌い、上機嫌になりながら志希はクレープ屋の看板メニューを眺めている。

ここ最近の志希ちゃんは、無自覚なのか、狙っているのか。どうにも見ていて分からないけれど、自分の心臓に悪いことが増えた気がする。「毎日こうして美波ちゃんのご飯が食べたい」なんて、ふにやりと破顔しながら言われてしまえば、どう反応をして良いのかが分からないし、返答に困ってしまう。勿論それは嬉しいけれど、なんだか当初の彼女と比べてしまつて、気持ちの奥ではむず痒しさが込み上げてくる。

今だつて、ほら、吃驚する程に穏やかな表情で……

「美波ちゃん、クリーム付いてる」

ひょいと私の口端へ付いていた生クリームを指で拭って、面白そうに志希ちゃんは指を舐めた。無自覚なのかな。

私へ向けていた志希ちゃんの鋭い眼差し、呆れ顔、冷たい声、そのどれもが嘘みたいで、今ではとても甘い砂糖菓子のように。番だからかな、そう考えてしまう気持ちはまだ微かに残っている。

本能と本能が惹かれ合うαとΩなら、否が応でもくっついてしま

から、今こうして隣に並んで座っているのも志希ちゃん自身の意思だ
と思いたいの、まだ不安な気持ちになってしまおう。

隣に座る彼女をちらりと盗み見れば、志希は美味しそうに苺とバナ
ナアイスのクレープを頬張っていた。その姿に、美波はじんわりと温か
な感情を抱く。私は志希ちゃんと一緒に過ごせて幸せだから、志希ちゃ
んも私と居て幸せだって感じてくれていたらいいなって。そう願いな
がら、もう一口クレープを頬張った。

「……………美波ちゃん」

「な、なに……………」

突然呼ばれ、驚きで肩がびくりと上がる。

「人の顔、じろじろ見過ぎ」

「い、ごめんね。クレープを食べている志希ちゃんが可愛くて……つ
い、」

「……………」

どうやら盗み見をしてしまったことが、彼女にはバレてしまっ
ていたらしい。美波はつい慌てて本音をぼろつと呟いてしまった。それ
に「可愛い」という言葉は本心だったけれど、彼女をからかう冗談のよ
うに聞こえてしまったのかもしれない。だって、美波が思わず言ってし
まったその言葉に、志希は固まってしまったから。

だけど、ちょっとだけ心配そうに志希の方を見ると、それも思い過ご
しのようで。彼女が意外にも耳を紅く染めていたから、美波も何故かつ
られて無言になってしまった。

「あの、志希ちゃん、次はどこへ回ろっか？」

「……………」

「服も購入したし、そろそろ帰る？」

「……………」

「し「体験型ホラーアトラクション」

「……………」

照れて(?)黙ったままになっていた志希が、途端スイッチが入った
ように美波の手を引いて立ち上がった。急なことに、素つ頓狂な声を出
してしまった美波なんてなんのその、ずんずん陽気に歩き出す。まるで、
今の志希はジェットコースターのようなのだ。はしゃいだり、大人しくなっ
たり、でもこういう志希のペースがとても好きで、楽しくて堪らない。
そういえば、体験型ホラーアトラクションってなんだろう？
疑問に思いつつもモール内を歩きながら、ふと通り過ぎた際に、とあ
るポスターが目に入ってきてしまった。正直、見なかった方が良かった
のかもしれない。

【三階 A・B合同エリアにて 体験型絶叫ホラー屋敷 開催中】

ポスターには、妙にリアリティがあるゾンビ達の絵とエリア案内が
書かれていた。

どちらかと言えば、美波はホラーが苦手だった。どちらか、というの
は映画のような映像のものならば平気だったからだ。映像なら好きな
時に停止ボタンを押すことが出来るし、役者さんが演技をしていると
考えれば、まだ怖くはない。

だけれど、体験型や現実のものとなれば話は別である。お化け屋敷の
演出はきつと美波を待つてはくれないだろうし、実際の心霊スポット
など論外である。怖いものは怖い。

「志希ちゃん、ちよ、ちよと待つて……………」

「にやはは♪やだー♪」

「じよ、冗談抜きで待つて……………」

そうして、志希に無理矢理連れてこさせられてしまった三階のその
エリア外で、中から聴こえてくる人の悲鳴が美波の不安を尚のこと助
長させた。慌てふためく美波など御構い無しにさっきの仕返しなのだ
ろう、志希はニヤリと口角を上げて笑っている。その表情を見て、美波

は別の意味で口角を上げてしまった。……引きつり笑いだ。悪い予感しかない。

「ほ、本当に入るの……？」

「あれ？ 美波ちゃんてば、もしかして怖いのか？」

「……っ、ちがつ」

しかし、今回の最大の敗北はきつと美波の負けず嫌いな部分だったのだらう。大の負けず嫌いである美波へ、ふふん♪と意地悪そうに志希へ笑われてしまったのなら、受けて立つしか道はない。そんな性格を志希は知り尽くしていたからこそその挑発に、美波はまんまと乗ってしまった。

「……いいわよ。お化け屋敷に入りましょう！ 志希ちゃん」

「にやはは♪ そうこなくつちゃ……おつと」

戦線布告とばかりに意気揚々と受付へ向かおうとした矢先、目尻にたつぷりと涙を溜めた幼い子どもが、志希の膝へ向かって走ってきた。とん、とぶつかつた子どもを優しく捕まえるも、美波と志希はどうしたものかと首を傾げる。迷子かな？ 美波はなるべく子どもを怖がらせないよう穏やかに問い掛けた瞬間、すぐ後ろから、その子どもの母である人物が頭を下げつつ美波達へ謝ってきた。

どうやらホラーアトラクションが怖すぎて、出口まで一人で走り抜けていつてしまったらしい。深々と頭を下げて去って行く親子の後ろ姿を眺めながら、美波はぼつりと呟いてしまった。

「泣くほど怖いのかな……？」

「子どもには怖いんじゃない？」

「大人は大丈夫……だよね？」

「にやははー♪ 楽しみだねえ、美波ちゃん」

さあつと血の気が引く感覚がした。焦る気持ちを抑えつつ、志希から渡されたチケットを美波は震える手で受け取った。

しかし、志希に弱味を見せるのもなんだか癪で「怖いなら手を繋いで

あげようか？」なんてからかってくる声を無視して、いよいよ入口への扉を開けた。

「きゃ——————！！！！」

高らかな悲鳴と共に、美波がゾンビの手を握り締めながら一緒に出口へ現れたのは、約二十分後のことであった。

無機質なものの、噓せ返するような多数のひどく入り混じった匂い、それらのものがツンと自分の嗅覚を刺激する。ショッピングモールへ着いた瞬間、彼女には申し訳ないが早く帰りたいという気持ちが湧き立ってしまった。

なら、何故ここを提案したのか。そんなことは決まっている。隣で嬉しそうにしている彼女を悲しませたくなかったから。デートが出来るのは志希も嬉しかったし、きっと内心では彼女の方が自分よりも相手が楽しんでもくれるかどうかを気にしている筈だ。彼女は優しい人だから。

それに、こうして隣を歩いていると帰りたい気持ちがすぐに消え去っちゃって、気になっていた匂いだって彼女の嬉しそうな顔を見たら吹き飛んじゃって、結果的にはあたしの方がデートを楽しんでしまっているんだよね。

——さて、話を戻そうか。

絶叫ホラー屋敷とやらに、悪戯心で美波ちゃんを引っ張ってきたのがあたしの間違いだった。びくびくしている表情を見て、珍しく本気で困っているなあとついながら、今更お互いに引けなくなってしまう、勢いよく前へと歩を進める。眉を下げながらも小さく「大丈夫、大丈夫」と呟き続ける美波に志希は密かに笑ってしまった。

さて、その実際の中なのだが、モール内にあるアトラクションの割にはよく出来ている創りで、扉を開けた瞬間にひやりと冷たい空気を肌を感じる。雰囲気も充分ある。案外、楽しめそうだ。

ふんふん鼻を鳴らしながら期待している最中、ふっと横を過ぎ去る影が一つ、二つ。仕掛けの人形のようなだった。その瞬間に残念かな、楽しめるかもと期待していた気持ちが一瞬にして砕けてしまったのだ。

何故かって？ ほら、あたしの嗅覚の力で近付いてくるものの距離

感やソレが、作り物かどうかも瞬時に判断が出来てしまったよね。だから、やっぱり怖いのは子どもだけかなって思っていたんだけど。

「……きやっ！」

「……美波ちゃん？」

「……………」

前言撤回。どうやら美波ちゃんも怖いらしい。

ちよっと意外だな、つてくすくす笑う。目の前を先に歩く美波ちゃんからは、表情は見えなくともあたしの笑い声にちよつぱり拗ねている様子だった。

「やっぱり手を繋いであげようか？」

「……遠慮しておきます。大丈夫なもの」

「ふくん？ ホントかにや……あ、美波ちゃん、そろそろ」

後ろから（生身の人間が変装しているであろう）ゾンビが近付いてくると思うよ。それと、前からも。」

しかし、志希が言うよりも早くゾンビが走って追いかけてくる。こんなところで嗅覚の素晴らしさを発揮しなくていいんだけどにや。呆れながら苦笑しつつも、美波ちゃんには充分刺激的だったらしい。暗闇なので上手く見えないけれど、美波ちゃんはひたりと腕を掴まれたのだから。……ナニに、つて？ そりやあ勿論、ゾンビに。

「し、志希ちゃん……？ 腕を掴まないで、歩き難いから」

「……いんや？ 志希ちゃんはナニもしてないよー」

「え？ だって、さっきから……………」

くるりと美波が振り向いた時に、志希の横には見知らぬ人（？）が立っていた。言わずもがな、ゾンビである。

「……………」

「あー……美波ちゃん？ これって結構、特殊メイク凄いね」

「……………き、」

「も、もしもーし。大丈夫だよ、注意書きにも書いてあったでしょ。腕

や肩に触れられても、お客様には危害を加えないって」

志希が必死に話しかけた努力も虚しく、数秒の後、物凄く大きな悲鳴を叫んだ美波は志希を中に置き去りにして、仲良くゾンビと手を掴み合いながら、出口までひたすら突っ走っていった。(二重に悲鳴が聴こえてきたので、出た後でも隣に居たのが志希ではなく、ゾンビという事実にはパニックになって叫んだのだと思われる。)

——その後。

仕方なしに志希も足早に外へ出ると、半泣き状態の美波と戸惑っているゾンビが一匹、係のお姉さんが一人、という何とも変な光景を目の当たりにした。状況は直ぐに察しがつく。もう大丈夫だという旨を係の人に告げ、お礼を言ってその場から立ち去った。

本当は、今すぐにも美波をからかいたい気持ちがあうずうずしていたけれど、それを実行しなかつただけ褒めてほしい。だって、普段はキリッとしている生徒会長サマがねえ……。意外な弱点を見せてもらったものだ。

微かに震えたままの美波の指へ、安心をさせるよう自分の指をそつと絡める。怖かつたからなのか、いつも志希より体温が高い美波の指が今はとても冷たい。笑い話にしたかったのに、流石に本気で泣きそうになっている美波には志希はとことん弱かった。

「ジュースでも飲む？ 美波ちゃん」

「……………うん」

「じゃあ、ここで座って待ってて。買ってくるね」

丁度良く、フリースペースのベンチが空いていた。夕方近くになったとはいえ、モール内の客数はまだ減りそうにない。空いていたのが幸運だった。エリア案内の図を見れば、自販機よりも近くにどうやらコーヒー専門店があるらしい。なら、そこで飲み物を買おう。志希は早速お店へ向かった。

そうして数分後、アイスコーヒーを両手に持ちながら、美波が待つべ

ンチへ向かうとした時のことだ。

「じっかし、まあなんていうか。……ささ」

面白い光景を見つけてしまい、志希は心底楽しそうに声を出して笑ってしまった。彼女はどこまでも新田美波らしくて、そしてやっぱり一緒に居ると退屈することが無いと実感する。ずうっと長い時間を過ごして、志希に飽きが来ないという人物は初めてだった。

それは、まるで絵に描いたようにお決まりのシチュエーションで。要は半泣き状態だった十可愛らしい美貌の美波ちゃんに、悪いムシが寄ってきたのだ。ああ、コレは騎士様が助けに行つてあげなきゃいけないやつ？ なーんて考えていたのも束の間、見知らぬ男性から強引に腕を掴まれた美波ちゃんは……相手の腕を掴み直して、あつという間に捻り上げてしまった。強過ぎでしょ。あたしも騎士なんて柄じゃないけどさ。

「……あ！ 志希ちゃん」

「ん。はい、アイスコーヒー。こつちは適当にミルクね」

「ありがとう。あの、さっきはごめんね。置いてけぼりにしちゃつて……」

「っ、いや、別に平気……だよ」

「し、志希ちゃん？」

先程の見知らぬ男性よりも彼女にとっては作りもののゾンビの方へ怖さを感じていることに、なんだかおかしく思えてしまつて。吹き出すことを必死で堪えていた訳だけれど、

「さっきの、大丈夫だったの？ ……腕掴まれてたでしょ」

「さっきの……？ 嗚呼！ 見ていたの？ でも大丈夫だよ、ちよつと絞つたら相手がすぐに何処かへ……って」

「ふ、ふふつ、……、は、にやはは」

「志希ちゃん？」

「ふ、ふふつ、……は、あははっ！ もうダメ、面白過ぎっ」

「へっ……？ な、なに？」

あたしはキミが、どこまでも面白い人間なんだって、改めて思い知らされた訳でして。

■ ■ ■ ■ ■

「次はこっち」そう志希に誘われるがまま、美波は素直に手を引かれていた。どうやらショッピングモールから出るらしい。いつの間にタクシーを呼んでいたのだろう、タイミング良く乗った先に行き着いた場所、テレビでもよく取り上げられている有名な超高級ホテルだった。

「……ここって、」

「あれ？ 知らない？ ……かなり有名だと思ってただけにやあ、まあいっか」

「い、いやいや！ 知ってるけど！ 知ってるけど……どうして……？」

そこは何万ドルの夜景が堪能出来ると有名で、料理は一流シェフが作ったフルコースを出されると、いっぞやのテレビ番組で見て知っていた。予約が中々取れないと言われている夢のような場所だ。先ず、一般人には手が届かない場所だろう。

でも、何故ここに？ そう美波は首を傾げる。泊まることは昨日から今までの会話で一切出ていなかった筈だ。

「んぐ……？ まあいいから。ちよっと手続きしてくるね。今日はここに泊まるよー」

「ちよ、ちよっと、志希ちゃん……！」

びと、美波の唇に志希の人差し指が当たる。無言で微笑まれた表情に美波は何も言えなくなってしまう。今日は楽しもうって思っていたのに、思い返せばどうにも志希の様子に違和感を感じている。

でも、何がだろう。何がおかしく感じるのだろう。初めてのデートだ

から？ ううん、きつと違う。違うのは、志希の雰囲気だ。いつもの鋭い雰囲気なんてすっかり無くなって、今日はお出掛けを楽しむ等身大の女の子な彼女へ、戸惑っているのかもしれない。

「……お待たせ、部屋に行こっか。美波ちゃん」

「あ、う、うん」

ホテルの最上階にあるVIPルームを予約したという志希は、ルームキーを挿し込んでから直ぐ、窓のブラインドの紐を引っ張った。目に勢いよく映った世界は、余りにも綺麗で息が止まる。まるで、魔法が掛かったかのように街がキラキラ輝いて、今ここに居る時間が幻のように感じてしまった。

嗚呼、そっか。そうなのか。だから、きつと、

「……あれ、ううん？」

横に立つ志希の声で、美波はハッとした。

どうしたのだろう、ぼりぼりと頬を掻いている。

「志希ちゃん？ どうしたの？」

「……んにや。あまり美波ちゃんが感動してないみたいだったから、外したかにゃうって」

「……………」

そんなことはない。そんなことはなかった。

だけど、きつと、あまりにも志希ちゃん、貴女が今日の私へ向ける愛情が甘過ぎて、色々と脳内が追い付かないの。冷たくされていたことに対してだって、前は平気だったのに、今では貴女を失うことが凄く怖いなにより今、この時間が本当に幻だったとしたら、私は絶対に取り乱してしまうから。

「今日の志希ちゃんは、いつもとなんだか違うね？」

「そう？」

「うん。だってこんな、」

——私を喜ばせようとしてくれている、なんて。

今までなかったでしょう？

でも、もし志希にそんなつもりは無くても、美波の自惚れだったとしたら。そう考えて、唇をぎゅっと結んでしまった。だけど、言葉を発しない美波の心情を察したのか、志希は一瞬だけ困ったように眉を下げて、観念したかのようにポツポツと喋り始めた。

「あたしさ、美波ちゃんのこと、なんにも知らない」

「……………」

「誕生日だって知らなかったし、好きなもの、嫌いなものも。番になってから数ヶ月は経つし、番になる前から数えたらもつと経つのに、あたしは美波ちゃんのコトをなーんにも分からないの。……………」それって、ナンだか悲しくない？」

「私は……志希ちゃんの誕生日は知ってたよ」

「ふふっ、そこで張り合っちゃう？　まあいいや。なんていうかさ、今はちゃんと好きだから、」

「これからも、もつと色々な美波ちゃんをあたしに沢山教えてくれる。」

そう言うってにはかんだ志希は美波の手を優しく握って、ゆつくりと薬指へキスを落とした。

著者 : 雪一

表紙 : 鏡 刀夜

発行日 : 2020 年 3 月 5 日

連絡先 : x6260x@yahoo.co.jp

PixivID : 9400566

Twitter : @Glitter__004

お気軽に感想など送って下さると嬉しいです。